

が、彼女はまだそれを信じようとしなかつた。生々しく白い二本の腕を出し、それを擴げて私の頸をかき抱かうとした。

「悪魔！ なめくぢ！ 絞め殺すぞ！」

二度目に言ふと、せい子は漸く、はつとした顔になつた。口をあつと開き、眼がギラギラと輝いた。頬の筋肉が怪しく痙攣つた。瞬時の間、凍り結いた様な睨み合ひがあつた。そして私は、精一杯の力を籠めて紐を引いた。それから後は何があつたか？ 激しい労力が數分間、振り合ひ絡み合つた。

氣が付いた時私は、ぐつたりとしたせい子を、膝の上に載せてゐた。ひどく重かつた。ぐんと突くと、セメント袋のたるんだ様に、づる／＼と膝から滑り落ちた。腕が脚が、伸び放題に伸びてゐた。暗い電燈が、その皮膚を怪しく照らしてゐた。

意外に持ち重りのするせい子の屍體を肩にして、私がそつと宿を抜け出したのは、それから三十分の後である。雪が降つてゐて、足跡の印く恐れはなかつた。城山の峻しい傾斜を下りると、だら／＼した坂になる。私の足は玄妙寺の墓地へ向けられた。

玄妙寺には伯母の墓があつた。せい子には決してそのことを知らせなかつたけれど、そこには

住谷家代々の墓があつた。私はその墓を、屍體隠匿の場所と定めたのだ。住谷家では火葬を嫌つて土葬にすることになつてゐた。墓穴は葬式の前日に掘られるのが常である。伯母の遺骸が收められるその穴へ、私は前以て、せい子をひそかに埋めようと思ひ付いたので。この邊りの習慣で穴は必要以上に深く掘られる。せい子を埋めた後、その上に棺がしづ／＼と下ろされて、やがて土が被せられれば、せい子は完全に地上から消滅するのだ。たゞそれだけのことであるが、それを私は苦心して思ひ付いたのであつた。

墓地の位置は豫め調べて置いた。赤い煉瓦で築いた半圓形の火葬場もあつたが、その横を抜けるとすぐに墓地である。入口には九輪の塔があり、松の木が、雪を白く冠つてゐた。松の木から三つ目の墓が住谷家の墓だつた。石碑の列を前にして、棺を収むべき穴は、果たして深く掘られてゐた。

私は躊躇なく、せい子の屍體を、どさりと中へ投げ込んだ。

用意して來たショベルを腰から抜き取ると、穴の周圍に盛り上げた土と雪とを、バラ／＼と落し始めた。頃を見て、繩を傳つて穴の底へ下りた。懐中電燈を照らしては、屍體の見えない様に地均しをし、そして又穴から這ひ出して來た。これで凡ては完全に成されたわけである。雪があ

まり多く降ると、穴の中が浅くなり過ぎ、いざ棺を下ろす時になつて、もう一度底を浚はうとする様な危険もあつたが、M市では一尺以下の雪は減多にない。大抵五六寸止りである。私は安心して墓地を離れた。

雪の中を宿へ歸り、衣服へ着いた土やその他のものゝ始末をみると、私は、ほつとして煙草に火を點けた。ぽかり／＼煙を吐いてみると、ひどく暢氣になつて來た。歌を唄ひ度い様な氣分であつた。今やつて來た鬼の様な所業が、まるで夢の様に思へたり、何かしら、怪しからずうまいことをして退けた様な嬉しさで、誰かにそれを話して見度くてたまらなくなつた。どこを見てもせい子はゐなかつた。部屋はがらんと廣かつた。はつは／＼、はつは／＼、私は思はず狂氣の様に笑つたが、その笑ひ聲は、聲にして見ると、突然にはねかへつて來た。堅いものにぶつた様に、カチンとはねかへつて來た。まだまだ、それ程安心してはならぬことに氣付いたのだ。

「せい子が行方不明になつたことを、さうだ、よほどりまくやらなきやならないぞ。」
さう思つて氣を轉換させる爲に窓を明けると雪はいつしか止んでゐた。宿へ歸り着いてから、たつた一時間程しか経つてゐなかつたが、雪が晴れて、山の端に高原特有の冬の月がかゝつてゐ

た。雪に蔽はれた丘や森や、遠くM市の屋並みが、雪の様に廣がつてゐた。雪は、六寸程降つて止んだのだつた。

五

翌十四日朝、私は洗面に行くと、すぐに言つた。

「お主婦さん、家内がゐませんがね、知りませんか。」

主婦は知らないと答へた。

「はてナ」私は呟く様に言つた。「すると昨夜のうちに言つたのかナ。」

「へ、どちらへ。」主婦ははたきの柄で背中を掻きながら言つた。

「いやね、昨夜お通夜へ行かなくちや悪いと言つたんだが、私が眠つて了ふと、そつと抜け出して行つたのだらう。」

「さやうでございますか、まあ、どうもねえ——」

朝飯を済ますと、宿を出た。玄妙寺の墓地へもう一度行つて見たい衝動に驅られたが、それは辛ふじて抑へることが出來た。寺の前を少し急ぎ足になつて通り過ぎた。

「おや、お一人？」

住谷家へ行くと、従弟健作の妻君が先づかう聞いた。東京から行つたせい子が、女達の眼を鋭くよせ集めてゐたことは充分に見抜いて置いたし、私は少しも驚かなかつた。

「お通夜に来てた筈だが——」私は白ばつくりて答へた。

「いゝえ、見えませんでしたよ。せめておせいさんだけは来て下さると思つて心待ちしてゐたのですけれとね。」ねの字に力を入れて、妻君は厭味まじりに言つた。

「いゝや、来た筈ですよ。ごたくくしてゐたので分らなかつたのぢやないですか。」

私は、宿の主婦に言つたと同じ言葉を繰り返した。従弟の妻君は、どうしてもそれを認めなかつたが、そのうちに混雑して来て、有耶無耶になつて了つた。不審がつて呉れる有難迷惑の人もあつたが、まあ、何かの行き違ひだらうといふことになつた。

出棺は午後四時の豫定であつたのを、雪で路が悪くなつてゐるといふので、二時間程繰り上げた。玄妙寺へ着いたのが二時四十分頃、墓へ繰り込む前に、その本堂で簡単な式があつた。

式の次第は省略するが、その間私は、式の進行が齒痒い様な、又は、式がいつまでも續けばよいといふ様な、矛盾した氣持で席に連つてゐた。讀經が無暗に長々しく、またひどく簡單に思は

れた。非常に美男の、黒い衣に包まれた若い僧が、式の終り際に、鴛鴦壇の階段を踏み滑りして、騒然たる物音を立てたが、それがひどく私を腹立たせた。僧は頭を垂れて席に戻つた。

式が終ると、大部分の會葬者は歸つて了つた。棺に添つて墓まで行くのは、近親と、その他特別に親しい人ばかりである。火葬場を右にして、列は佻しく墓地へ進められた。解け残つた雪が、バサリ／＼と音を立て、樹々の梢から落ちてゐた。

私にとつては、最も大切なる時であつたが、私は始めのうち、極めて冷靜な態度を保ち得た。

何氣ない體で、然し誰よりも先きに、墓穴の縁に近づき、そつと中を見下ろして見た。穴の中は薄暗かつたが、それでも底の雪でよく見えた。せい子の屍體は完全に無い。凡てが豫定の如くである。ほつと安心して後退らうとすると、眩く様な聲を聞いた。

「はてナ、これはへんだぞ。」

見ると、がつしりした體格の紳士であつた。後に聞いたところによれば、それはM市で辯護士をしてゐた俵巖といふ男であるが、彼は私同様に穴を覗き込んでゐた。

「どうかしましたか。なにがへんですか。」

「え？」俵は顔を上げて私の眼を見たが、穴の中へ再び視線を落した。「なに、大したことではあ



録梅巖郎史星

りません。が、矢張りへんだナ。」

俵といふ男は一種の狂人であつた。つまりぬことまで意味あり氣に見る妙な癖を持ち、かう言つたきり、容易にそこを離れなかつた。

「さ、どいたどいた、棺を下ろすのだ。」

一人の老人がかう言つて俵を押し退けようとしたが、俵は執念深く動かなかつた。

「俵さん、ちよつとどいて下さい。」

「は、いや。俵は残念さうに身を引きなから言つた。この穴はいつ掘つたのですか。」

「昨日の午後掘りあげたので、その時に儂がちよつと検分に来ました。」

「だとすれば、どうもへんですね。」俵は又しても穴の中を覗くのだつた。

「どうしてです。なにかありますかな。」

「ごらん下さい。穴の中に、ばかに澤山雪があるぢやありませんか。」

「昨夜雪が降つたのだから當り前ぢやありませんか。穴には蓋がしてありませんからナ。」

「はつは、ムム、それアさうですね。いや、勿論これは大したことはありませんが、昨夜は風がひどかつたでせう。」

「さよう、その通りでしたナ。老人は持て餘したといふ顔であつた。

「ですから、風があつたのだから、穴へは雪が眞直に降り込めない。どつちかの側にはうんと積

り、一方にはまるつきり積らないのがほんとうです。それが、あゝして一面平らになつてゐます

よ。」

私はどきんとしたが、老人は嘲る様に言つた。

「俵さん、何を仰有るのだ。さうなつてゐたから、隠坊が底を均して呉れたのでせう。おい、お

前、さうだらう。」

隠坊は、最後に墓を埋めるべく、人々の背後にぬつと立つてゐたが、ぞんざいな口調で答へた。

「そんなことしやしねえ。昨日の日暮れ方に掘り上げたまんまだぞ。」

棺は既にその場へ昇ぎ込まれてゐたし、會葬者の間からは不平の聲がぶつくと湧いて來た。

そして私は黙つてこそ居れ、俵をぶちのめしてやり度い様な心持であつた。不必要な會話が、

一刻でも早く終るのを待ち望み、いら／＼しい氣分であつた。

「然しでえいち、これア確かに二尺がた浅くなつてゐやがる。」

それは、うど長と呼ばれてゐる少し低能の隠坊だつたが、そのうど長が人々の間からのつそり

と現れて、かう言つてからは、その場の空氣が、急激に悪い方へ傾いて行つた。棺を下ろすといふ様な場合に、かうしたちよつとした言ひがよりは、ひどく不吉に見えるものなのだ。俵の言葉やうど長のそれが、不思議な力で人々を壓迫し、うど長が、穴の底を調べて見ると言ひ出して、誰一人はつきりした反對を申立てなかつた。うど長は、汚れたロップを持つて來て、樗の根元に結びつけて了つた。

「氣の迷ひだよ。なんのことがあるものか。」

私の背後ではそんな呟き聲がしたけれど、憚る様に語尾を濁らして、舌打ちだけが高く聞えた。

六

「逃げ出さうか。」

私は最初さう思つた。が、それはよけい悪いことに氣が付いた。そして又、せい子の屍體が掘り出されたところで、私が犯人だといふ證據はない。さうも思つて僅かに安心した。私と俵とは、穴を隔て、向ひ合つてゐた。一步でも動けば、直ちに疑はれるぞ、そんな氣がして立ち竦んでゐた。

やがてうど長は、ロップを手頼つてそろそろと墓穴へ下りて行つたが、慄ち異様な叫び聲を立てた。よろ／＼と蹣跚いて僅かに身を支へた。彼の足が底へ届くか届かないかに、恐らく彼の足は屍體の關節をでも踏みつけたのであらう、ポキツといふ不氣味な音と共に、雪の中から一本の足が、にゆつと突き出たのだ。穴を覗いてゐた幾つもの顔は、あつと一様に背向けられ、また再び、前よりも深々と覗き込まれた。どや／＼と人々が集まつた。

瞬間、不氣味なる沈黙があつた。

間を置いて、俵の聲が高走つた。

「雪を掻き退ける。もつと掘るんだ！」

うど長は、腹ん這ひの様な恰好になり、雪を注意して掻き退け始めた。うど長の身體が邪魔になつて、私にはよく見えなかつたが、黒つぽい着物や、蒼い皮膚などがかすかに見えた。手や胸や顔などが、だん／＼に現れて行くらしかつた。

「乞食か？」誰ともなく言つた。

「乞食ぢやアねえが——」うど長は、怪しい笑ひを含ませて答へた。

「男か女か？」

「へえ、へッへムムム、女だぞ。」

奇妙に皆んなが押し黙つてゐると、續いて又うど長の聲が響いて来た。

「女だが、へッへムムム。首から上だけ男だぞ。くりくり坊主の男だぞ。」

「なに、なんといふ?!」

私は思はず口を差し挟んで了つた。

せい子がくりくり坊主になつてゐる。こんな莫迦なことがあるであらうか!「そんな筈はない!」危く口から出かゝつたその言葉を押へて、私は棒の様に立ち盡した。

「みんな分らねえつちや。そんなに穴の縁へ顔を出しちやア暗くつて分らねつちや。」うど長が又言つた。

「どこかに負傷をしてゐるか。傷はないか。」俵が訊ねた。

「分らねえ。狹えところで動けねえ。誰かこゝえ来て呉れる。穴から出さねえことには、まるで法がつかねえぞ。」

俵は、ぐるつと人々の顔を見廻したが、美男の若僧を眼に止めると、もう一人寺男を呼んで来て呉れる様に頼んだ。會葬者中、白無垢の婦人達に立ち混り、黒衣の裾を長く垂らしてゐたその僧は、蒼い顔をして寺の坊へ立ち去つた。

小柄の寺男が来て、うど長と二人で屍體を擔ぎ出した時、流石に私はすぐにはそこへ行けなかつた。不思議にも罪の發覺に對する考慮は消え失せて、ただ恐怖そののみであつた。いつの間にか人々の群を抜けて、墓の片隅に佇んでゐた。

「尼だ! ほんとに尼だ。」

「なるほど、くりくり坊主だ。」

それ等の聲が聞えて来ても、私は足を釘付けにして動かなかつた。が、そのうちに、愕然として我を取り返した。罪の意識が、私を呼び覺したのだ。

人々を押し分けて見て私は、然し、退け反るばかりに驚かされた。あゝ、なんとそれは、眞實の尼僧であつたのだ。一分程に伸びた髪の毛には泥と雪とが僅かに附いてゐたが、そして手足やはだけられた胸は、明らかに女であつたが、それは珠數を手に持ち、略式の僧衣を身に纏つた。一人の年若い尼僧であつたのだ。

顔を引いた顔は、色こそ蒼ざめてゐたけれど、彫像の様な純正さを有つてゐた。眉は細く唇は小さい。頬から鼻へかけて、高貴なる曲線がなだらかに這つてゐた。明かに醜怪なるせい子で

はない、私は茫然としてその屍體を見守つた。

「この尼さんを君は知らないか。」

依は寺男に訊ねたが、寺男は知らなかつた。例の若僧も答へられなかつた。そして會葬者中、誰一人それを知るものがない。已むなく、屍體は一時そのまゝにして、警察へ人が走らされた。

M警察署から署長以下数名の警官、M地方裁判所から豫審判事及び検事等、それ等の人々が慌しく玄妙寺の墓地へ駆け付けて来たのは、それから一時間程の後である。従弟の健作始め親戚縁者はひどく迷惑であつたに違ひないが、然し已むを得ないことであつた。例の墓穴はそのままとし、大急ぎで掘られた別の穴に、日のとつぷりと暮れる頃、伯母の亡骸は下された。そしてその間、墓穴と屍體とは警察の手によつてとり囲まれ、しきりに調査が續けられた。せい子の屍體が、まだその下にありはしないか、そんなことも考へられたけれど、墓穴からは尼僧の屍體以外に何も出なかつた。せい子の屍體は、完全に紛失し、その代りに尼僧が埋められてゐたのである。私にとつては、餘りにも意外なる、ことの推移であつたのだ。

署長や検事や、何かひそくと囁く様子で、それを私はどんなにしても聴き取りたかつたけれど、到底叶はぬ望みであつた。僅かに俄敵が、死因は絞殺であるらしいことを聞き出して来たに過ぎなかつた。絞殺と言へばせい子と同じである。私は、ふるつと身を震はした。

七

對山館へ歸つてから翌日の夕方まで、私の頭はあらゆる苦悶を味つた。もろくの疑惑、もろもろの不安、それが脳味噌をグワツと掻き廻してゐた。せい子の屍體と尼僧のそれとどうして入れ代へられたか。尼僧を投げ込んだ奴は、きつと私のしたことを見たに違ひない。さうとすれば、私は早晚捕縛されるのだ。いや、そ奴も殺人罪を犯してゐる。迂濶には口を開けまいだが、いつたいそ奴は誰なのだ。……

で、十五日の午後四時頃まで、私は對山館の一室にちつと閉ぢ籠つてゐたが、そのうちに氣が氣でなくなり、M警察署へ出頭して、せい子が十三日の夜以來、何處にも姿を見せなくなつたと届けて置いた。尼僧の寫眞を見せて呉れて、これではあるまいねと言はれたが、私は兎も角違ふ旨を答へて置いた。せい子の屍體がいつどこから現れるかも知れないのである。迂濶なことは言へなかつた。

住谷家へ立ち寄つて夕飯を呼ばれ、宿へ歸らうとすると、日がすつかり暮れてゐた。凍て結い

た路を、私は城山へ向つて歩き出した。しん／＼と寒い夜であつた。

M市を出外れると月が出た。城山が眞白に横たわつてゐた。

玄妙寺の門の前まで来た時であるが、私はあの時の現象を非常に不思議に思つてゐる。死者の靈魂と生者との間にも、心理學に言はれるところのテレパシー、或は精神感應のあることが信ぜらるゝなら、それを私は信じたい。科學で説明され得るだけの眞理が眞理であり、説明し得ざる眞實が眞實でないといふことは、餘りにも狹隘なる科學者の頭腦である。あの時の現象を、私は、精神感應の實例として擧げたいのだ。山門の前まで来た私は、恰も引つ張り込まれる様に、玄妙寺の境内へ這入つて了つた。そして鐘樓の傍に身を潜め、ちつと寺内の様子を窺つた。何が私をさうさせたか、それこそ、精神感應と言ふより他には説明の仕方がない。私は見えざる靈魂に呼び寄せられたのであつた。

何分の後であつたか、私は本堂の横手から一つの黑影が、衣を纏つて然し靴を穿いた異様な黑影が、月に照らされた庭へ、ぽつかり浮び出たのを見た。する／＼と動いて山門へ行き、音も低く、その山門へ登つて了つた。私は、再び夢遊病者の様に、然も靴すら脱ぎ捨て、その後に従つた。

柵ち古びた山門の欄上は、月ではつきり陰影が付けられてゐた。そつと見ると、儼の美那の若僧が立つてゐる。足下には黒いものが横たわつてゐたが、私は危く聲を立てようとした。手があたり首がある。言ふまでもなく、それはせい子の屍體であつた。僧は、放心した様にそれを見下ろしてゐた。

暫くの後、私は雪の中を這ふ様にしてゐた。その場を見届けて山門を降りると、間もなく例の若僧が、黒い大きな包みを背負ひ、靜かに庭へ降り立つたのである。私は、それを追跡し始めた。

墓地の横手を過ぎると、一面の桑畑であつた。僧は、道のないところをフラ／＼と歩いて行く。私はなるべく道の方を、時には土手の中腹を、見え隠れに隨いて行つた。積つたまゝの雪の上へ出ると、バリ／＼と音がして、表面の固い雪が破られた。

對山館の灯影を避けてか、僧は途中から右に外れた。雑木林があり、凹地があつた。凹地に頭が没したかと思ふと、ぢきに向ふの丘へ姿を現した。葉の落らた雑木林を半分廻つて僧は、びたりと立ち停つた。私は雪の上へ腹を付けて寝て了つた。

あらゆる細心の注意は、私をして次第に僧へ近づかした。長い時間を費して、私は雑木林を

反對の側から廻つて行つた。身を隠すものが無くなつた時、むつくり身を起すと、向ふでは雪の上に乗つてゐたのを、はつと立ち上らうとした。

「待ちなさい！」

私は素早く走つて僧を捕へた。彼は、へた／＼と雪の上に崩折れた。

「屍體をどうした？」私は言つたが、そのすぐ傍に雪が小高くなつてゐた。せい子の屍體は埋められてゐるのだつた。私は聲を低くして言つた。「私は警察のものではない。君と同じ様に、人殺しをしたのだ。」

「え！」

彼は私の顔を穴の明く程見詰めたが、やがて恐怖の色が消え去ると、あゝ、それはなんたる美しき若者であつたらう。夢見る様な瞳、艶のない青味、月光を浴びて、その顔は透き通る清らかなさを漂はしてゐた。

「私は惠眞を殺しました。あなたがこの女の人を殺したのですか。」

彼は靜かに言つたのである。私達は雪の上に坐して、不思議な會話を取り交し始めた。

八

「私は石巻昌泰といふのです。」

美男の若僧昌泰が語つたのを、私はこゝにそのままに記録する。それは次の如くであつた。

「私が生れたのは、もつと／＼雪の深い國でした。幼い時にそこから連れ出されたので、どこの國だつたか分りません。山や河の貌さへ、はつきりとは覚えてゐないのです。私は全く物心の付かない頃、妹の惠眞、さうです、あれは私の二つ違ひの妹なのです。がその惠眞と共に、父に連れられて旅に出ました。父は澤山の金を持つてゐたと見え、随分方々見物したことを覚えてゐます。」

私達が寺へ這入つたのは、私が十歳の時でした。えゝ、父にはその時に別れたきり、一度も逢つてはをりません。生きてゐるか死んだのか、それさへ分つてはをりません。で、惠眞は、私が十三になつた時、京都のある尼寺へ連れて行かれ私はその後學校に入り、一心に勉學を續けました。今はもう學校を卒業しましたが、研究はまだこれからだと思つてをりました。玄妙寺へも、實は一月程前から研究の爲に來てゐるので、お手傳ひの傍、このM市の古典を調べてゐたので

す。

ところが十日頃のことでした。私は京都にゐる筈の恵真から一通の手紙を受け取りました。考へて見ると、あれが京都へ行つてからもう十年にもなりますが、その間二度程しか逢つてゐません。それだから手紙は大變嬉しく思ひましたが、見ると、何か容易ならぬことでも起つたらしい文面でした。そして、十三日の夜、M市へ行くからといふことが書いてあるのです。心配な様な、楽しい様な、妙な氣持で十三日を待ちました。

十三日の夜、私は恵真を停車場に迎へましたが、どうしたのか、普通の婦人の着る様なコートを着、耳隠しとかいふ髪を冠り、まるで俗に還つた様な風彩で汽車から降りて来て、私の肩をそつと叩いたものでした。譯は後で話すから、人目に觸れないやうに連れて行つて呉れといふので、私は苦心して恵真を玄妙寺へ連れて來ました。私の部屋へその夜恵真が這入つたことは、まだ誰にも知られてゐないのです。

恵真が部屋へ這入つてコートを脱ぐと、下は僧服でした。そして聲を忍んで泣くのです。手袋を脱いで左手の甲を見せましたが、無論私には何んのことか分かりません。すると恵真はそこにあつた霜焼けの様な腫れ物を指し示して、これは癩癩の徴候だと云ひました。

恵真の説明によると、その腫物から、癩癩だといふことが知れたのでした。大阪のある醫學校の先生に診て貰ひ、その他四五人の醫師に診て貰つたのですが、診斷はどれも同じでした。そして然も、恵真は妊娠してゐるのです。戀人は京都の學生だとか言ひますが、どうしてもその人の名を明かしません。

聞いた時の私の心をお察し下さい、父が私達を寺に入れた譯や、行方不明になつて了つた理もよく分かりました。私達は生れながらに悲しい運命を背負つてゐたのです。

さて、恵真と話してゐる間に、私は恵真が自殺を決心してゐるのを見抜きました。恵真もそれを打ち明けました。世間へは知れぬ様に死んで了ひ度い。戀人にこんな身體だつたことを知られぬ様に死んで了ひたい。さう言ふのです。私はお墓の棺の下へ埋めたらと、ふと思ひ付きました。心を鬼にして恵真の自殺を手傳ひ、住谷家の墓へ、その屍體を運んだのですが、どうでせう、そこにはもう、別の屍體があるではありませんか。え、今聞いて分つたのですが、私はその屍體を山門へ運び、恵真の屍體をそこへ埋めました。恵真の屍體こそ、誰にだつて見せるものか、さう思つたのです。二つの屍體を一緒に埋めては、穴が浅くなり過ぎると考へたわけですが、それがあんなことになつて了つて、俵さんといふ人を、私はどんなにか恨めしく思ひます。そして

この屍體はまさか、あなたの奥様だとは思ひませんでした、なるべく長く人目に付かぬところをと思つて、こんなところまで運んだのです。許して下さいますか。」

昌泰の物語を聞いて、私は引き入れられる様な心持になつた。私の残忍なる行動に比して、彼の心持がどんなに同情すべきものであるか。私はそれを殊更に言はぬ方がよいであらう。私も又、凡ての事情を打ち明けて話した後、服の雪を拂ひながら言つた。

「然し、君は注意しなくちやいけませんよ。私はまだ、當分大丈夫と思ふけれど、君の方は屍體が発見されてゐるのだから——。」

「え、お互に黙つてゐませうね。」

彼は淋しい微笑を浮べて、さう答へたのであつた。

九

二日の後、それは珍らしく暖い日であつたが、私は突然に、M地方裁判所の検事調所へ呼び出された。

何の爲に呼び出されたのか知りなかつたので、大きな不安を感じたが、それはせい子のことと

關してゐた。

そして検事は言つた。

「あなたの奥さんは行方不明になられたさうですが、その前後の様子は警察へ届けられた時の通りですか。」

「さうです。」私は度膽を決めて答へた。

「午後八時頃床に就いて、その時お通夜に行かなくては悪いといふ話をし、翌朝眼が覺めると姿がなかつた？」

「その通りです。」

「然るに、住谷家の方へは少しも顔を出さなかつたといふのですね。」

「誰に訊いて見ても、同じ返事でした。」

「住谷家へ行くのにはどの道を通つたのでせうか。」

「玄妙寺の前の道だと思ひます。」

すると検事は満足さうに頭を下げた。

「や、どうも煩いことをお訊ねしました。實は、城山の下に女の絞殺屍體が発見されまして、そ

れが着物の柄と言ひ身長と言ひ、あなたの奥さんに違ひないのです。」

「え！」

「その様に驚かれると思ひましたので、ちよつと考へることもあり、前以て今の様なことをお訊ねしたので、お氣の毒なことを致しましたが、然し、ぢきに犯人は上りませう。」

私は愕然として言葉もなかつたが、それからすぐに屍體を見せられた。私はせい子の屍體を三度見たわけである。或は三度引き寄せられたとも言へる。死んでまで、彼女は執念深く私に付き纏つてゐた。

屍體を見て歸らうとすると、検事は私の肩を軽く叩いた。

「事件はちよつと變つてゐますがね、ぢきに片が付きますよ」

意味あり氣なその言葉を耳の底に残して、私は逃げる様に對山館へ歸つた。

× × ×

殺人、屍體隠匿及び遺棄といふ罪名で、石巻昌泰が豫審に起訴されたのは、その翌日である。

私が検事に逢つた時、既に昌泰は拘留されてゐた。私はそれを知らなかつたのだが、警察の活動は實に激活だつた。そして事件はそれ以來、實にも驚くべき早さで意外な方向へ推移したのであつた。

先づ第二に、惠貞と昌泰とが兄妹であることがすぐに知れた。全國の尼寺を調査して惠貞の身元が判明し、續いて昌泰といふ兄のあること、兄が玄妙寺に来てゐることが忽ち分り、昌泰は即刻拘留されて了つた。

第二に、せい子の屍體が案外早く発見された。獵師が発見したとのことであるが、前述の様

有様で、私には少しも嫌疑が懸らず、昌泰の方へそれが懸つて行つた。同様な絞殺であつたし、そ

れに、屍體の遺棄されてゐた場所から、玄妙寺までの間に足跡があつた。私がある所から對山館へ歸つた足跡は、偶然にも雪の解けた然も芝生のところが多かつたと見え、誰にもそれと知られな

つたが、昌泰は、道のないところを多く歩いた。桑畑などをよけいに歩いた。殊に屍體を捨て、了ふまで、昌泰は二人分の體重を足に支へてゐた。飛び飛びではあるが、昌泰の穿いてゐた學生

靴にびつたり合ふ足跡が、大體一續きになつて発見されたのであつた。

第三に、昌泰は拘留されたその日のうちに、すつかり覺悟を決めて了つた。流石に癩病のことは言はなかつたが、惠貞殺害をすぐに自白した。妹が僧の身の上で妊娠し、然も戀人の名さへ知らぬ様子なので、激怒の餘り殺して了つたと自白した。亡き妹惠貞にとつては、兄の心盡しがよく傳つたことであらう。

第四に、昌泰はせい子をも殺害したと申立てた。自ら進んで申立てた。彼は山門の上で、妹を殺したが、その時下を通りかゝつたせい子に氣付かれ、已むを得ず殺して了つた。穴の中へ二人一緒に埋めなかつたのは、淺くなり過ぎて怪しまれるのを恐れたのだ。せい子の方は他人だし、従つて又その屍體がよし人に發見されようとも、自分と全く縁のない人であるだけに、自分が疑はれることはない。さう考へたのだ。」と陳辯した。私の罪までを負ふ積りであつた。

十

昌泰の自白から虚偽の告白までを、私は約一週間程の間に全部知つて了つた。妻のせい子に關する事件だつたので、割合に早くそれが知れたのである。私はいろ／＼のことを考へねばならなかつた。

昌泰の餘りにも犠牲的友情的好意を、私は心苦しく思つたが、好意を無にしたくもなかつた。最初のうち、私は決してこの事實を告白する積りがなかつたのだ。然し、やがて私の心に變化が起つた。妻の死を聞いて、兄正郎が東京から來て呉れたのが十二月の末で、その頃になると私は思ひもよらぬ寂寞の感を味ひ始めたのである。妊娠の如く嫌つてゐたせい子があなくなつたことは、その當座私を伸び／＼させる様に思つたが、然しそれは、全く裏切られた。

十三日の夜の恐ろしい場面、上に跨つた私の顔を見た時の彼女の嬉しげな表情、それが痛ましく憶ひ出された。死の刹那まで私を戀ひ慕つた彼女の心根、否、死んでまで私を呼びよせ度かつたらしい彼女の愛着、それ等を思ふと、茫然とした悲しみが胸に充ちて來た。

「彼女も呪はれた女であつた。そして私も同様であつた。さうだ、自首するんだ。贖罪の一部を果す爲に、さうして昌泰兄妹の爲によき道連となる爲に。」

私はさう決心したのである。

そして暇乞ひの爲に兄に逢つて告白をした。

兄は賛成したが、東京にゐる父にも暇乞ひをしろと言つた。ところが上京すると、兄は私をこの一室に押し込めて了つたのだ。

「女房が殺されたので史郎は氣が狂つた。飛んでもないことを言ふ。」

兄は言つたに違ひない。さうして今もその言葉を續けてゐるのだ。

罪業妄想とは、あゝ、なんとよき病名であることよ。

今や私は、語るべきことを全部語り盡したと思ふ。百人のうち一人、千人のうち一人、或
 は一萬人の一人でもよい私は私の言を信じて呉れる人が欲しいのだ。書き終つた今では、何より
 氣にかゝるのがそれである。
 繰り返して言ふ、私は決して狂人ではない。誰がなんと言はうとも、私は冷静なる星史郎なの
 だ。

蛞
 蝓
 綺
 譚

「蟾蜍は妖術家である。」
 と、作者は先づかういふことを言つて置いた方がいゝかと思ふ。無論讀者諸君は嗤はれるであらう。簡単な中學校程度で用ふる動物學の教科書でも、そこには次のやうなことが書かれてゐるのだ。

曰く、蟾蜍は腹足動物中有肺類に屬し雌雄同體である。體は頭と胴との二分に分たれるがその境は明瞭でない。頭部には長短二對の觸角があり、長い觸角の頂に眼がある云云。

多分動物學者は一匹の蟾蜍を捕へて來て、蟲眼鏡で覗き込んだり解剖したり、あらゆる仔細な觀察を下した後この記述を書いたものであらう。そして讀者諸君も又この記述を少しも疑つてはをられない。全く以て無理ならぬ次第で、だが、蟾蜍は果してこの記述通りの下等動物であらうか。作者はこの點に少し疑ひを抱いてゐるのだ。

古風な譯では、蟾蜍に化ける妖術家の話がある。そして又、蟾蜍と蛙との間には、不氣味な因果律があるとも言はれてゐる。が、さうした譯はあまり莫迦くしくて困りものである。我々はもつと手近なところに、あの蟾蜍のいかにも妖術家めいた行動を見付け出さなくてはならぬのであつて、物好きな讀者諸君に對しては、先づ次のやうな實驗をお勧めしたい。……
 即ち、先づ一匹の蟾蜍を捕へ、これに食鹽を振りかけるのだ。多分誰でも知つてゐること、思ふが、鹽を振りかけたまま少時これを放置すると、我々は彼が不思議にも非常に粘稠な液體に變つて了ふのを認めるもので、この際蟾蜍は鹽の爲めに溶けて了つたと稱してゐる。が、諸君、ほんとうを云ふとこれは大嘘なのである。鹽では蟾蜍は決して溶けない。溶けたやうに見せかけるだけのことなので——とすれば、茲に一つの疑問が起る。彼の身體が全部消滅したのは何故であるかといふ疑問であつて、それこそ實は彼の妖術なのである。彼は鹽を振りかけられた瞬間だけ、くるりつと身を縮めて葛饅頭みたいな球體になる。出来るだけ自分の持つ表面積を少くして鹽に冒されまいとする譯で、尤も最初だけは頭から長い觸角をよろ／＼と出す。動物學者の説の如く、觸角の頂に眼のあることは確かである。彼はその眼によつて敵の動靜を窺ふので、ところが、彼の全身を刺戟する鹽は四邊に山と積もつてゐるし、やがてはその觸角をくね／＼と縮

め、微動すらしないうらになつて了ふ。と、この時一方に於て鹽を振りかけた人間は安心する。彼が死んで了つたと考へるのであつて、これを例へば十能に載せて戶外へ捨てるのであるが、諸君、こゝに於て遂に彼が妖術を用ふべき機會が來たのである。——五分、十分、いや、残念なことには作者はうっかりしてその時間を記録することを忘れたのだが、兎に角、割合に短い時間の後にその現場へ行つて見れば、彼は殆んど完全にその場から消えてゐるのだ。驚くべき早さでもつて、彼は何處へともなく姿を隠す。そこには彼が皮膚から絞り出した、黄色いどろんとした固まりを残すだけである。何れの方向へ逃げ去つたか、その痕跡さへも認められぬことが多いのである。

蟹を石で叩き潰して日當りのよい場所に曝して置くと、蟹は數百匹の蛭に變るといふ説があつて、しかし恐らくは誰も實地にその變化を見届けた者はないであらう。言つて見れば蜃蛤の場合が恰度それである。彼は前述のやうな妖術を不思議にも人間の眼の前では決して行はない。敵が傍にゐる時には、甘んじて鹽に埋もれて死んで行くので、彼の妖術を實際に見ることは容易でない。強ひて説明すれば、彼は傍に敵がゐらなくなるや否や、自分の身體を蜘蛛の巣のやうに細くして、讀者諸君、それがどの位の細さであるかを想像し給へ。——蜃蛤と蟹との間にある行者がどうしてそんな短時間のうちに、かゝる放れ業をすることが出来るのだらう。作者は矢張それを一つの妖術であると言ひ度いのだ。

蜃蛤がいかにも不思議な方法によつて身を隠すか、作者は今僅かにその一例を擧げたに過ぎない。讀者諸君は相變らずニヤニヤして作者の言葉の阿呆らしさを嗤つてゐるであらう。よろしい。作者は次に、もつと奇怪な事實譚について、蜃蛤が妖術家であるといふ證明をしよう。その譚は實は餘り新しくない。今からはざつと十年以上も前のことで、だが、蜃蛤に關する實例としては、實に適當な話なのだ。その頃旭團と呼ばれてゐた曲藝師の一行があつたので、その中にお才といふ女が一本竹の臺の太夫を勤めてゐた。それが即ちこの譚の主人公である。

二

お才に就いて、その詳しい経歴は不明である。彼女は九州邊の生れださうで、いかにも南國の女らしい黒く長い髪の毛と伸びやかに彈力のある四肢を有つてゐた。そして顔も相當に美しかつたが、可哀相なことには、生れついでの啞であつた。旭團に入つてから間もなく父親の不明な私

生兒を生んで、幸にしてその子はすこやかに育つて行き、四五才の頃から、逆立ちだとか鞦韆だとか、さう言つた簡単な曲藝を仕込まれ始め、この譚の事件が起つた頃には、もう九才にもなつてゐた。芳太郎といふのが、旭團の團長の附けて呉れた名前であるが、その芳太郎は眼のくりくりした大變惻愾な少年だつた。曲藝の上達も仲々早く、お才が一本竹の臺の太夫を勤めるのに對し、彼はもうぢきに、その上乘りの太夫を勤められるところまで上達してゐた。親子二人で一本竹を演ずる機會が、もう目前に近づいてゐた譯なのである。

「おや、雨だぞ。」

或る年の十月十二日のことである。この日旭團は本門寺の祭禮で興業してゐたが、その夕方のこと、團員の一人がひよいとかう言つて空を見上げた。本門寺の祭禮と言へば驚くべき多數の群衆の出るのが有名で、その日も何萬といふ人々が寺の境内に集まつてゐた。自然、旭團の小屋も大入りだつたが、愈々群衆が出盛つて來たといふ時になつて、ポツリと大粒な雨が落ちて來たのだ。

野天興行に雨程呪はしいものはない。それで旭團では一心になつて空模様を持ち直すのを待ち望んだが、最初ポツリと落ちた雨は、忽ちのうちに、本門寺全山水煙りのうちにあるやうな豪雨になつた。見る／＼名状すべからざる混亂が、山門前の急傾斜の石段をひ

た揉みに揉んで押し上らうとする信者達と、上にゐた見物の群衆とが激しく押し合ひ喚き合つた。旭團の小屋は杉木立を伐り拂つた廣つばにあつたが、こゝも混亂は同様である。沛然として下る雨がもう相當重くなつた天幕をがむしやらかな勢ひで叩きつけ、餘勢が場内の到る所へ瀧のやうに落ちて來た。見物達は最初のうち小屋の中に立ち竦んでゐたが、雨が、餘りに激しいので、結局は外面にゐると同じ位に濡れしよぼれた。がや／＼と彼等は喚きながら、やがて小屋を見捨てて、行く。降り出してから三十分ばかりの後、小屋の中には一人も見物の姿が見えなくなつた。見物人が立去つた後の小屋の中は、實に慘澹たるものであつた。紙屑や藁蓆がぐしよくしよに濡れて、そこへ下からは泥水が遠慮もなく押し込んで來た。團長始め、最年少の芳太郎までが、まるで洪水に遭つたやうに狼狽てふためいて働いた。見物人用の薄つぺらな座蒲團や、演技用の道具だの衣裳だの、それを雨と泥水から救はねばならぬ。幸にして表へ向いて張出しになつた二階の樂屋は、どうにかかうにか雨洩りが少ない。兎に角、そこへ一同は避難したのである。電燈が消えたのでカンテラを點けたが、風のためにその焰は絶えずゆらくと揺れてゐた。一同が押し黙つてその樂屋に固まり合ひ、急にがらんとした了つた舞臺と客席との方を眺めた時、誰の顔にもがっかりした色が現れてゐた。時々激しい雷鳴がして、その度に本門寺全山パツと眞晝の

やうに青く光つた。五重塔や木立などが、クツキリと青い光の中に現れては、すぐに元の暗黒に歸つて行く。――芳太郎は、犬の箱の傍に縮こまつてゐる、お才の懐に緊みつき、絶えずブルブルと顫へてゐた。この少年は、滑稽な位に雷が嫌ひだつたのである。

カンテラは樂屋内の道具や人の姿を、奇妙に明滅する物の怪のやうに照らしてゐた。可成長いこと誰も口を利く者が無い。「暗いなア」誰かゞポツンとこんなことを言つたが、誰も返事をする者がなかつた。團長は團長で、いつまでもがら空きになつた場内を見下してゐるし、松造と呼ばれてゐる道化師は、頭に冠つた赤い帽子を、両手で確乎りと抱へ込み、猿のやうにぢつとカンテラの火に見入つてゐた。

が、雷鳴が益々激しくなつて來た時である。團長の傍に、その時までこれは割合に平然と巻煙草を喫かしてゐた金三郎といふ男が、突然キヤツと叫んで飛び上がった。

「どうしたんだ？」

と誰かゞ言つた。金三郎は顔面一杯に恐怖の色を漲らして、唇を紫色に變へてゐた。誰も金三郎の恐怖の原因が分らない。お才が芳太郎を抱いたまゝ身體を横に游がして、ちよいと指先きに何かを掴んだ。

お才は啞だつた。その指先きに掴んだものを金三郎の目の前へ差し出して見せた。
「ウワツ！」

と金三郎は唸るやうな悲鳴を擧げたが、それは小さな一匹の蛞蝓だつた。金三郎といふ男は、小柄な癖にひどく膽つ玉が大きくて、團員中では兄貴分に立てられてゐたが、どうしてかひどく蛞蝓を怖がつてゐた。お才は冗談の積りであつたのだらう、その蛞蝓を人差指に絡ませてスツと金三郎の顔へ近づけた、金三郎は必死の顔色で逃げようとする。そこにゐた道化師の松造の背後へ小さくなつて突伏して了ふ。お才はカラ／＼と笑つた。そして蛞蝓をポイツと自分の口へ投げ込んだ。蛞蝓と見れば、お才はいつもそれを生きたまゝ食べて了ふのが常だつた。

團員が低くゲラ／＼と笑ひ始めた。

「兄貴、ひどく意氣地がねえぢやアねえか」

松造が言つて金三郎の肩を軽く叩くと、金三郎は漸くにして顔を擡げた。血の氣のない顔である。が、一同がゲラ／＼と笑つてゐるのを見ると、彼の顔にはむら／＼と憤怒の色が現れた。
「うぬら、何を笑やがる！」

金三郎がスツと立上つたので、ゲラ／＼笑ひはピタリと止んだ。金三郎は少時の間順々に團員の顔を眺めてゐたが、そのうちにお才の傍へズイと寄つた。

「阿魔、やりアがつたナ。」

どうして呉れようと、金三郎は瞬間逡巡つた風である。が、ふいに彼はニヤリと笑つて、お才の抱いてゐた芳太郎の襟頭に手を掛けた。

「いやだ、小父さん堪忍して——」

芳太郎が懸命に母親の胸元へ緊み付くのを、金三郎は力に任せて引き離した。ストンと音を立て、芳太郎の小さな身體が團長の膝元へ投げ出され、次にはお才がヒーツといふ悲鳴を擧げた。

金三郎は齒を憎々しげに剝き出しながら、お才をそこへ押し倒し、無り矢理にその着物を剝ぎ始めたのだ。腕いて抵抗して、だが、お才は金三郎に勝てなかつた。暗いカンテラの光の中で、少時二人は野獸のやうに絡み合つて、その間にお才の着物が一枚づゝその場へ投げ棄てられた。

「下りろ、小屋の下へ行つて見ろ！」

金三郎は言つて、露はなお才の腕をぐいと掴んだ。引摺るやうにして狭い梯子段から下りて行つた。木戸口でお才はもう一度抵抗をしたが、その肩へピシリと鞭が加へられた。相變らず雨が

白い飛沫を上げて躍つてゐる。その中へ金三郎がお才を引出したのだつた。

凄じい稻妻がする度に、樂屋にゐた團員達は、杉木立を背景にして、巨大な白蜥蜴のやうな生物物が、奇妙にヒラリ／＼と踊るのを見た。その生物の肌へは、荒れ狂つた雨がサアチライトのやうに流れ落ち、傍には一人の侏儒がぐる／＼とその周圍を廻つてゐた。それは奇怪なフィルムのやうに美しく、水を透かして深海の發光魚を見るやうな景色だつた。時々、雨に混じつて鶴のやうな悲鳴が聞こえて来て、團員達はその度に慄然としながら、しかしいつまでも黙つてこの不可思議な舞踊に見惚れてゐた。

三

午前三時、お才は樂屋の眞下で、熊の檻の蔭に濕つぽい夜着を引被り、ちつと芳太郎を抱き締めてゐた。その時は流石の大雨も霧雨に變り、團員一同ぐつすり鮪のやうに寝込んでゐたが、彼女だけはわざと下へ来て寝たのであつた。

小降りになつたとはいへ、空氣は重く濕つぽかつた。棧敷板を剝して来てそれを床板代りに地べたへ敷いたが、それもじめ／＼と濡れてゐた。大きな藪蚊が絶間なく彼女の顔を襲つた。芳

太郎はお才の胸元へ丸い可愛らしい頭をこすりつけるやうにし、脚の方は二本共母親の太腿の間へ突込んでゐた。雨の中でさんぐくに冷えて、だが、お才の身體は芳太郎の温もりで汗ばんで來てゐた。じつとり、氣味悪い程に汗ばんでゐた。

お才が、ともすれば團員の誰彼に苛められることは珍らしくなかつた。口が利けないのをいゝことにして、團員はめいゝに悪虐な戯れを擅にした。逃げよう、死んで了はう、お才は幾度もさう思つたに違ひなかつた。が、お才と雖も、かうした曲藝師の一行をさうく容易に逃げ出せないことは知つてゐた。芳太郎だけを頼みにして、ぢつと辛棒してゐるより他はないので、それは今夜も矢張り同じだつた。いつたいが金三郎は團員中でもお才にとつて最も恐ろしい男であつて、今迄にも度々ひどい折檻をされてゐた。お才は殆んど先天的に金三郎を恐れてゐたので、それがどうして、蛞蝓を種にして金三郎を擲擧ふやうな氣持になつたのだらう。彼女は自分で自分が分らなかつた。

お才は長い間眠れなかつた。まじく〜と眼を見開いて、小屋掛の柱や天幕の裾がバタ〜と風に揺れるのを眺めてゐた。この時實は、本門寺の本堂から間斷なく叩かれる團扇太鼓の音かしたのであるが、彼女の世界は音の無い世界であつた。萬物、森の夜に沈み切つて、この世の中に生

きてゐるものはお才一人のやうに思はれた。と、そのうちにお才は、ハツと何かに氣付いた風であつた。パチ〜と臉を二三度瞬いて、それからつる〜と夜着を脱け出した。芳太郎は何も知らずに眠つてゐる。お才は熊の檻の背後を廻り、素足のまゝ、小屋の外へ忍び出た。

小屋の建てられてゐた廣つばには、旭團の他に幾つもの同じやうな天幕張りが並んでゐた。因果物師だの地獄廻りの見世物だの、それらは矢張り雨のためにぐつしより濡れて、潰れかゝつたやうに立つてゐた。霧雨をぼつと透かして、本堂の明るみが流れて來る。お才はその廣つばをピタピタと横切つて本堂の方へ進んで行つた。泥濘るんだ赤土に、ともすれば足を取られさう、だがちきに巨大な本堂の軒下へ出た。見ると本堂の中には今しも電燈が煌々と輝いて、廻廊まで充ち溢れた信者がゐた。皆白い着物を着て、何かに憑かれたやうな顔付きをしてゐた。無暗に口をパクパクさせ、手には音の無い團扇太鼓を叩いてゐる。お才の目には、それが妙に狂氣染みたまのに見えた。彼女はぞくりと身を顫はせて、しかし、するりと廻廊の下へ潜り込んだ。

二十分ばかりして、お才は廻廊の下から再び姿を現したがその顔には少なからぬ失望の色を浮べてゐた。そして今度は本堂から高廊下續きの別棟の堂宇へ行つて見たり、又は事務所の横から

庫裏の方へも廻つたりした。顔に現れた失望の色は段々濃くなる。そして最後には本堂から可成離れた暗つばい納骨堂へ近づいて行つたが、と、忽ち彼女は咽喉の奥でキ、キ、キ、といふ怪しい音を立てた。

失望の色がパツと消えて、押へ切れぬ喜悦か湧いて来た。

黒ずんだ丸い柱の根元が、本堂からの薄い餘映で、ぼんやりとそこに見えてゐる。そしてその柱には、五六寸にも餘る巨大な蛭蟪が一匹、のつそりと上向きに這つてゐた。どろどろした、闇を吸ひ集めたやうな光澤を發して、その青黒く透き徹つた魔術師の指のやうな觸角を靜かに伸ばし、ものうげにお才の方を眺めてゐた。觸角の根元には、普通の蛭蟪には見られぬやうな、横に走つた白い縞がある。縞が怪しく蠕動した。

キ、キ、とお才はもう一度笑ましげに叫んだ。そして暫らくの間その巨大な蛭蟪に見惚れてゐたか、やがてついと手を伸ばした。その時蛭蟪は思ひもよらぬ速度で頭を右に振り向けて、お才の顔を睨むやうにしたが、指先が背中に觸れると同時に、じわくと觸角を引き込めた。頭と尻尾とがくるくると縮まり、二寸餘りの玉になる。ころりと地べたへ落ちやうとするのを、お才は素早く、掌に受けた。吟味するやうに蛭蟪を見て、

「キ、キ。」
とお才はもう一度笑つたのだつた。

四

翌日、本門寺の境内は前日の賑ひには及ばぬながら、子供達か相當多く集まつて来た。元來がこの祭りは第一日の夜だけが非常に賑はふので、その翌日は嘘のやうにがらんとする。が、見世物の方では前夜の豪雨が祟つてしまひ、幾分でもそれを取戻さうとして、朝早くから、銅羅や樂隊で附近の町々を廻つて来た。子供達は、急ぎ立てられたやうに、森の奥へ集つたのである。

旭團では午前十時に木戸を開けた。小さい見物人達が、それでも次第に流れ込んで来る。喇叭、クラリオネット、大太鼓小太鼓、赤いズボンを穿いた三人きりの樂隊が、爽やかな秋の森の中へ、毒々しい騒音を振り撒いた。

「おい、出だよ！」
晝に間近くなつた頃、道化師の松造が派手な紋付にタツツケ袴を穿き、頭には黄色い鉢巻を巻いて樂屋の口へ顔を出した。そしてそこにゐたお才の肩をポンと叩いた。お才はハツと蒼い顔を

したが、松造は「早く来いよ。」とお才の袖を引つ張つて置いて、舞臺の方へ下りて行つた。その時金三郎が縞の半股引に緑色のピカ／＼光つた上衣を着て、樂屋の隅からひよいと立つ。お才も續いて立上つた。黒い紋付きに白い縦縞の大柄な袴を穿いてゐた。

金三郎の姿が舞臺に現れると見物達はワツと歡呼の聲を浴びせた。この男は非常に優れた曲藝師で、だから一行中で一番に人氣があつたのである。舞臺は地べたから一尺ばかり高くなつた板張りでその周圍に大きく傾斜した見物席が作られてゐる。金三郎とお才とは並んで舞臺の中央に立つた。

「太夫御目通り叶ひますれば——」

松造は野卑に道化た身振りで口上を遣つた。そして傍に立てゝあつた三丈餘りの青竹をお才に渡した。お才が少時の間、その竹竿の尻を肩に當てゝ、小手調べといふ恰好で空のまゝ調子を操つた。金三郎が身輕にお才の肩へ乗り、そのまま竹をスル／＼と攀ちて行く。お才がこの時、ピクリと頬を痙攣させたけれど、誰もそれには氣付かなかつた。

「先づ最初は——」

松造がそこで何か口上を遣つた。竹の頂上から四分の一ばかり下つた所に、手頸や足頸を絡ませる爲のいりぐらといふ輪がついてゐる。金三郎はそのいりぐらの腕で兩腕の間に竹を握み、ひつたりと坐禪型に止まつたのである。

息を入れて、金三郎は一寸見物席を眺めたらしい。が、すぐに兩手を竹から離し、じわ／＼と體を後ろへ反らして行つた。竹にくつと撓ひが来て、お才は腕を水平に開き、じり／＼と前屈みの姿勢を取つた。そしてそれが終ると再びもとの姿勢に歸り、今度は左へ水平に肩を移動させた。金三郎が同じく横へ體を開いて、正面大の字の形になつたのだつた。

「體を元へと取り直し——」

松造はかう言つて拍子木をチョンと一つ叩いたが、その時ふと氣になつた風でお才を見た。お才の顔には、髪の毛の生え際から細い脂汗が浮いたのである。が、すぐにそのまゝ口上を續けた。

「上なる太夫は右足頸をばりうづうに掛け、體は次第に突き出す、暫くは鶯の谷覗き——」

金三郎は上で何事も知らなかつたらしい、口上通りに右足頸をりうづうに入れて、下向きに體を突き出した。頭だけを反らせて、兩腕をパツと開いて見せる。「ハアツ！」と掛聲をして、上眼に見物席を眺めやつた。

蟬止りから始まつて、下り藤、正面大の字、鶯の谷覗き、と、こゝまでは割合に樂な演技だつた。りうづうを手懸りにして、いつも竹に手か足かが絡んでゐるので、しかし後に松造の語つたところによれば、彼はこの時かすかな不安を感じ始めた。「鶯の谷覗き」が終つてから、金三郎が一旦呼吸を整へた後、竹の頂上へ登り出すと、松造の目には、竹竿に不思議な微動が見えたのである。

「オヤ？」

松造の頭の隅でチラリとそれを不審に思つた。

五

だが、松造の不安はすぐに消えた。金三郎がいつもと變らず、鮮かに竹の頂上へ登りかけてゐるのだ。その手があと二三寸で竹の切口へ届かうとしてゐた。

「竹頂上に登り詰めますれば——」松造は少し狼狽てたやうに言つた。「上なる太夫は、先づ最初は竹切口に我が腹を當てがひ、兩手兩足を一度に離し——」

「腹龜大の字」といふ型なのであつた。金三郎はすぐにそれに取りかゝつたのだつたが、

と、愈よ手が竹の切口へかゝつたとすると、彼はハツとしたやうにその手を引き込めた。そして何事か言ひ度さうにその瞬間下を見下ろしたが、又思ひ返した様子で、手を竹の切口から二寸ばかり下に支へ、ぬつと頸を上へ伸ばした。

「どうしたんだ！」

松造もヒヤリとしてさう言つた。が、するとその言葉は、同時に起つた消魂ましい叫び聲に打ち消されて了つた。

「ウワア！」

と金三郎が叫んだのだつた。途端に竹がゆらりと動いて、そしてそれよりも先きに金三郎の柄な身體は、くるんと中空で一つ廻つて、舞臺の中央へ墜ちて來た。

瞬間、小屋の中はびたりと聲が静まつた。見物の顔が、號令を掛けられたやうに一齊に下へ向けられた。少時して、椽數にポツンと一人立上る。と、あちらこちらに續いて人が立ち始め、同時にブツ／＼といふ低い囁き聲が起つて來た。そしてそれは次第に大きく膨れて行き、忽ち、號泣に似た叫び聲が小屋の空氣を掻き亂して了つた。

墜落した金三郎は、ほんの瞬間、兩脚を空様に伸ばし切つて、まるで逆立ちのやうな恰好にな

つたが、間もなく首のところからボキンと背中の方へ折れ曲つた。頭が床板を突き破つたのだつた。折れ口の咽喉佛は、最初見物の方へ向つて不氣味に白く光つてゐたが、やがてその白い咽喉へ、血がつかつかと鮮かな糸を引いた。……

見物達の號泣に應じて、松造を始め團員等はバタ／＼と金三郎の傍に駆け寄つて来た。が、只一人その騒ぎのうちにあつてお才はぢつと身體を鯨乎ばらし、殆んど失神したやうに立ち竦んでゐた。彼女は昨夜捕へた蛄蟪を、言ふまでもないことながら、そつと竹の切口へ止まらせて置いたのである。餘りにも手際よく金三郎が墜落すると、ぐつと内臓を引き抜かれたやうな氣持になつた。金三郎の咽喉から次第に激しく血が噴き出して来るのを、茫然と彼女は眺めてゐた。

が、さうしてゐるうちはまだよかつた。可成長いこと彼女はポカンと口を開いてゐて、それから漸く我に返つた時、ごくんと唾を嚙み込んだけれど、その時、恐ろしいことが起つて了つた。「アワ、アワ——」

お才は聲を立てた。口から咽喉へ、づるんと下り込んだものがある。ひどく粘稠な、そして滑かな物體だつた。

——あ、あれだ！——

お才は咄嗟に思つた。そして癪りにそれを吐き戻さうとした。平生は好んで食べてゐるのにも似ず、それは身顫ひするやうに怖かつた。金三郎と一緒に、その蛄蟪が偶然にお才の口の中へ飛び込んだのだつた。指を入れて吐き戻すやうにしたけれど、だが、その確かに生きてゐる物體は、かすかに蠕動しながらお才の食道を下つて行つた。粘つこい唾が、ふいに口の中を泡だらけにする。怪物は遂に胃袋まで行き着いたのである。

お才は全身がガタ／＼と戦くのをどうすることも出来ず、やがてその場へ崩れるやうに坐り込んで了つた。

六

幼い見物達が警官の手によつて場内へ追ひ出され、それから検屍が始まつた場面については、詳しく述べ立てる必要はあるまい。金三郎は醫者が駆け付けて来た頃、既に全く絶命してゐた。頸の動脈が切れたので、どうにも助けようがなかつたのだ。そしてそれは誰の目にも過失と見え

た。へい、實は演つてゐる途中で幾分か常と變つてゐるやうにも見えましたが、つまりは金さんが

いけなかつたのです。」

松造は警官の問ひに對してかう答へた。竹竿にブル／＼と細かな振動が來たにしても、そしてお才が額に脂汗を浮べてゐたにしても、金三郎墜落の直接原因は、彼が「腹龜大の字」をやる前に、奇妙にどぢを踏んだからであつた。警官はそれでも注意深く、竹を手にして調べて見たが、何も變つた點を認めなかつた。警官がその方へ氣付いた時には、流石にお才も正氣になり、切口の粘液をひそかに拭ひ去つて置いたのだつた。殊に、最も肝腎な蛤蝮は、誰の目にも觸れない所へ潜んでゐた。

「過失死」

遂にさういふことになつたのである。そしてこれは、旭團の身になつて見れば、この際何よりものことであつた。花形であつたとは言へ、兎に角一人の團員が缺けただけなのである。彼等は、この本門寺の興行でこそ、散々の體であつたけれど、間もなく横濱へ行つて興行を始めることが出來たのだつた。

一方お才は、金三郎の死後二三日間、ひどくおどく／＼としてゐたが、日數が經つにつれて、次第に元氣を取戻して行つた。彼女の頭では、金三郎墜落後の始末をどうするか、犯跡を如何にし

て隠蔽するか、恐らくそれまで考へてはゐなかつたであらう。いや、或は金三郎を殺すことすら考へてはゐなかつたか知れない。たゞ、一寸した嚇かしの積りであつたかも知れない。が、それは豫期以上に巧妙に行はれたのだつた。誰もお才を疑ふものはないし、そして今は金三郎程に彼女を苛める者もゐなかつた。彼女はやつと幸福になりかけたのだつた。

「芳坊、うまくやれよ。」

「うん。」

「坊は今にこゝの花形になる。みつちり勵んでやつて行けよ。」

横濱で興行を始めてから第三日目のことであつた。團長は表看板の下へ椅子を据ゑて、機嫌よく芳太郎を勵ましてゐた。お才はその傍に、芳太郎の身仕度を直してゐる。金糸銀糸を縫ひ込んだ上衣を着せると、白粉の刷毛を右手に持つて、芳太郎の顔を引き寄せた。厭がるのを、無理矢理その顔へ白粉を刷いてやる。そしてお才は、キ、キ、と嬉し氣に笑つた。金三郎死後、芳太郎が小さい身體で一本竹をやることになり、今はその出幕の前なのだつた。間もなく、例の松造が顔を出して、二人は樂屋から舞臺へ行つた。

松造の口上は相變らずだつた。そこにはもう金三郎の死に對する思出の滓もないやうであつ

た。

「太夫御目通り叶ひますれば——」

お才には松造の口の動きで意味が分る。すぐに竹を手にとつたが、注意深く根元から頂上までを調べて見た。あの後新しく出来たお才の癖なのである。そして異状がないことを確かめると、ストンと音をさせて竹を立てた。芳太郎は上衣の襷をヒラ／＼させて、母親の肩から竹に移つて行く。

芳太郎はまだ充分に馴れてはゐなかつたが、藝には危氣が見えなかつた。蟬止りから始めて、鶯の谷覗きまでをスラスラと演じた。そして愈よ竹頂上に登つて腹龜大の字、それも無難に済んで行つた。見物達が、一つの型毎にパチパチと手を叩く。

「上なる太夫は——」松造は満足さうに下から叫んだ。「竹切口を我が脊に當てがひ、両手兩足を離しますれば、これぞ千番に一番の兼合ひ——」

言ふうちに、芳太郎は腹を高い天井に向けて、身體を指環のやうに反り曲げて行つた。「脊龜大の字」に移るのであつた。これが終れば次は「流星星下り」すつと一氣に竹を迂り下りるまでのことである。が、今や芳太郎が脊向きになつた姿勢のまま、靜かに兩手を離して了ひ、それから

次に兩足を働かに離した時、お才の顔は、サツと土氣色に變つた。

竹竿の、お才の肩からは二尺ばかり上であつたが、そこに彼女は實に意外なものを見た。突然——眞に突然、そこへは巨大な蛤蟪が出現したのだ。充分に異状の無いことを調べてあつた竹だのに、然も、最も大切な呼吸時に、ふいに彼は出て來たのだつた。

「アワ、アワ、」

お才は痙攣つた舌を動かして、辛くもそんな叫び聲を發した。五六寸にも餘るその巨大な蛤蟪には、觸角の根元に珍らしい一條の縞があるのを、お才ははつきりと認めたのだつた。

「お、おい。」

上では既に芳太郎が兩足を一尺餘りも離してゐた。松造はハラ／＼してお才を見やつた。が、お才は恐怖に壓倒されて、でも懸命な努力で動じまいとしてゐた。全身がぞくと總毛立ち、たら、たら、と汗が額に流れて來る。と、蛤蟪は悠然と頭を一つくねらせた。そして鼠色の觸角の頂に、不可思議な眼を光らせた。ちつとお才の顔を覗き込むやうにしたかと思ふと、ツツツ——と下へ這ひ出した。

驚くべき速さなのだつた。見てゐるうちに、お才の眼の前二三寸のところまで迫つて來る。

「アワ！」

鋭い叫び聲と共に、到頭彼女は眩暈がして、勢の弱つた獨樂のやうに、くらくくとそこで蹣跚け始めた。途端に、穹窿型に張られた小屋の頂きからも、引き裂くやうな悲鳴が降つて来て、芳太郎の小さな身體が、すつと空を切つたのである。

「やつた！」

松造も叫んだ。他の團員も叫んだ。まるでそれが期待したことであつたかのやうに、彼等は口を揃へてさう叫んだ。

七

讀者諸君、作者は漸くにして蟻蛙に關する一つの實例を語り終へたのである。芳太郎墜落後、そこにはどんな混亂が起つたであらうか？ それも話せば切りのないことであるが、今や作者は、それよりも蟻蛙の妖術に關する話をせねばなるまいと考へるのだ。いつたい、あの巨大な蟻蛙はいかにして突然お才の頭上に現れたか、それを少しく吟味したいが、諸君、だがなんと不思議なことではあるまいか？

作者の経験によると、蟻蛙は時々我々の居室へ何等の豫告なしに突然出現する動物である。蟻蛙をきちんと敷いた、それも成可くは何んとなく陰氣な感じのする一室がよいのであるが、さうした部屋でほんの鳥渡の間だけ電燈を消して置くのである。すると、電燈をパツと點けた次の瞬間、彼は魔術のやうにその疊の上に現れてゐる。或は灰色の壁の中央に現れてゐる。歩いた痕を示すところの、あの銀色に光つた線は何處にも見えない。お才の頭上に現れたものも、多分これと同様であらうが、しかしこの場合には一層不思議な點もある。演技前にはその蟻蛙がゐなかつた事、及び、蟻蛙は決して蜘蛛のやうに絲にぶら下がつてその位置を變へるものでないといふ事、その二つの點は兎も角として、彼は明かに觸角の根元に一條の縞を有してゐた。金三郎を殺した蟻蛙もさうであつた。では、それが同一の蟻蛙であるといふのか。いやいや、金三郎を殺した蟻蛙は、完全にお才の胃の俯に収まつた筈だ。

作者は結局、蟻蛙は妖術家であると言はざるを得ないのであつて、だが、且て作者はこの話を或る友人に聞かせてやつた。その友人は科學者といふ非常な厄介な種類に屬する人間なのだが、すると彼は次のやうに答へたのである。

「つまりだね、金三郎を殺した蟻蛙も二度目に現れた奴も同じなんだよ。」

「だからさ、それが何故だか分らないのだ。」

「だからさ、」と友人は鸚鵡返しに言った。「先づ第一に、お才が金三郎の墜落した時、蛙蟪を嘔み下したといふのが間違ひなのさ。お才はその時に少時の間茫然としてゐた。そしてポカンと口を開いてゐた。それで彼女は、氣が付いて口を閉じた時に、非常に粘稠な唾液の固まりを嚥んだのだ。彼女は氣が轉倒してゐる。それですつかり思ひ誤まつて了つたのだ。犯罪の恐怖、その爲にそんな錯覺を起したわけだ。」

「ふーん。」と作者は答へた。「だが、三週間も経つた後に、然も充分調べてあつた場所へ突然に現れたのは何故なんだ。それが君に説明出来るか。」

「無論出来るさ。」友人は言つた。「金三郎が墜落した後、蛙蟪は竹の切口からその内側へ這ひ込んだのさ。その切口には多分僅かの乾割れがあつたのだ。然も彼が内側へ這入つて見ると、そこには彼が最も喜ぶところの濕氣があつた。本門寺の豪雨がその中へ沁み込んでゐたので、それで彼は約三週間といふもの、その竹の内側を上下してゐたので、たまく最後、彼は節でない竹の肉壁に同じ乾割れを發見したんだ。そしてそこからにゆるくと現れて見ると、それがお才の肩から二尺ばかり上だつたといふ譯なのさ。」

「さうかなア……」

作者は只こんな風に答へて置いた。

どちらの説が正しいか、これは讀者諸君の判斷に任せるとしよう。

死
の
倒
影

やうだ。要するにどちらにも、半面の眞理を語つてゐるといふものだが、僕は、ふと君に僕の偽らざる過去を語つて見ようかと思ひ立つた。君は僕と大して親しい間柄ではなかつた。だから君に向つてこんなことを告白するのは當を得てゐないやうにも思ふけれど、まあ、そんなことを餘り詮索するにも當らぬだらう。

實をいふとね、僕は、今度A先生殺しの犯人として擧げられた。それは大體の事情は君も知つてゐることだらうが、その経路を僕の口から、詳しく語つて見度いと思ふし、それから、實は僕は、その他にも二人の人間を殺してゐる。今日までは誰にもそれを黙つてゐた。が、何故か急にそれを打明け度くなつた。多分、僕にも幾分か善人のところがあつて、今までは誰も友達といふものがなかつたところへ、君が突然あんなことを言つて呉れたので、それが僕を喜ばせたのだ。

尤も、君は僕の告白を聞いて、或は不愉快になるかも知れない。僕が餘りにも恐ろしい人間であることを知つて、急に僕のことを先天的犯罪者だと言ひ出すかも知れない。

が、それはそれでも構はないだらう。僕はどうせもう死刑になるのだし、天性善人であらうが悪人であらうが、毫も關係のないことのやうに思ふ。兎に角、ゆつくりと僕の奇妙な告白文を讀んで呉れるやうにお願いして置く。

M君――。

僕の記憶は、僕が五つの時から始まつてゐるのだ。それ前にも臆氣に何かあることはあるが、こゝではさうした追憶を避けて置かう。

で、その最初の記憶といふのは、今言つた通り僕が五つで隣村の祭禮に親戚へ行つた時のことだ。僕は兄弟が三人で、その一番末が僕だつたが、その時は三人揃つて母と共に行つたと思ふ。行つて見ると、向ふの親戚には大へんに可愛らしい七つぐらゐの女の子がゐて、僕はこの子と遊ぼうと思つて一生懸命で後を追ひかけた。が、その子は僕をひどく嫌つて上の兄弟達ばかりと遊んだ。それで僕は泣き出して母親のところへ告げに行つた。すると母親が、

「それアお前無理もないぞね。そんな妙な顔をしてゐて、誰がお前なんぞと遊ぶものかな。」と言つた。僕がこれを聞いてどう思つたのか覚えてはゐない。が、このことが今でも奇妙に頭へ残つてゐる最初の記憶だ。

それから後のことは種々あるが、僕が友達から仲間外れにされることに氣が付いたのは、小学校へ行くやうになつてからだと思ふ。学校の成績は大へんに良かった。が、一度學校から外へ出

ると、誰も僕とは遊んで呉れなかつた。一度はこんなこともある。僕は水鐵砲を作らうと思つて近所の竹藪へ手頃な竹を伐りに行つた。するとそこに多勢の仲間が相撲を取つてゐた。面白さうなので、僕も傍からこれを見てゐたが、誰も僕に取れと言つて呉れるものがなかつた。

「おれ、とろか？」

言ふと、皆んなは始めて僕のことには気が付いて、何かボソ／＼と相談を始めた。そして仲間のうちの一番弱いデン公といふのを土俵へ出した。

「デン公とやつて見ろやれ。」

「おれはいやだ。デン公は弱いから——」

「そんならよせやれ。」

僕はもつと強いのとやり度かつたけれど、仕方なしにデン公とやつた。そして忽ちのうちにそこへ彼を押し倒した。がすると仲間達はバラ／＼とそこへ出て来て、上になつてゐた僕をぐるりとデン公の下へ引繰り返し、それからデン公に軍配を擧げた。

この時も随分口惜しかつたが、その後尋常科の四年になつた時、もつと口惜しい眼に遭はされた。先にも言つた通り、僕は學校の成績がよかつたので、教室では仲々羽振りの利いた方だつた

が、この四年の時に受持だつたSといふ教師が、これは何處と言つて特徴のない、而も長な顔の青年だつたが、これが随分ひどく僕を苛めたのだ、尤も僕の方も生意氣なところがあつたのかも知れないけれど、その最初には或る時のこと、この教師が僕達に或る冒險談をして呉れた。押川春浪の小説で、シベリアへ幽閉されてゐる西郷隆盛を壇原建闘次とかいふ男が、獅子に乗つて救ひに行くといふやうな話だつた。教師にはそれが非常に面白かつたらしい。そして同じクラスの仲間達も、息を詰めてその話を聞いてゐた。が、僕だけ一人、その話の途中で、兄の机からこつそり持ち出して来てゐた中學世界を讀み出したのだ。

「B、何を讀んでゐる！」

突然その教師が言つた。そして僕の持つてゐた雑誌をぐいと取つた。

「ふむ、こんなものがお前に分るのか。」

「分ります。」

「さうか。分るなら分つてもいいが、人が話をしてやつてゐる時には聞いてゐるものだ。」

「でも、その話は出鱈目だから面白くありません。押川春浪のものでは怪人鐵塔か海底軍艦の方が面白いです。」

何か言ふかと思つたが、その時は苦い顔をしただけで黙つて了つて、だがその後次のやうなことが起つた。

當時僕の村には汚い芝居小屋があつて、なんでもあれば春蠶の上簇つた頃だつたらう。その小屋へ岡本某女といふ源氏節が掛つて来たが、その一座のうちに、非常に可愛らしい子役がゐた。女の子だつた。僕は一座の町廻りの時にこの女の子を見て、是非もう一度顔を見度いと思つた。が、家では芝居へなど決して僕を連れて行つては呉れなかつたしそこで一策を案じ、前にも言つて置いたデン公を騙した。

即ちデン公はその頃村の〇〇〇〇の者達が所有してゐた池へ行つて、こつそりと鮎や鯉を釣つて来てゐた。僕はデン公に會つて、〇〇〇〇の者達がこれを知つてひどく怒つてゐる。だから家から十五錢ばかり持つて来い、代りに行つて謝つて来てやるから、とかう言つてやつたのだ。

僕達の村ではその頃小遣錢を常に持つてゐる子供などはなかつた。それでデン公はその十五錢の金を盗み出して来て僕に渡した。僕は早速芝居を見に行つたのだが、その翌日である。デン公の母親がこのことを知つて學校の教師に告口した、多分、デン公が金を盗み出したところを母親に見付かり、遂に僕のことを知れたのだらう。

その日の授業が終ると、S教師は僕を呼んで折檻を加へた。その折檻がどんなにひどいものであつたことか、今の僕でも僕が悪かつたことは認めるが、教師も又甚だ没常識であつたと思ふ。不恰好なこの頭が悪いといつては打擲し、この大きな顎がさうした嘘を言つたり、或は生意氣な口を利くのだと言つて、唇や頬をぐいぐい抓つた。最後に雨天體操場へ立たされて日の暮れるまでそこにゐた。チチ、チチ、と雀が鳴いて體操場の軒を飛び交つてゐた。窓から見ると、教師達がテニスをしてゐて、その球が時々夕日を浴びては高く空へ上がった。グラウンドの隅では、廻轉ブランコが、ギリ／＼、ギリ／＼と音を立て、さも愉快さうに廻つてゐた。

僕は終ひに涙が出て来て、その時に、涙といふものは鼻汁と一緒に出るものだといふことを始めて知つた。眼を細めて涙の玉を透かして外を見ると、遠くの山の輪廓が二重にも三重にも見えるのが面白かつた。

で、最初は兎も角、僕にも悪いところがあつたのだし、折檻されたのは仕方がないとして、だがそれからS教師は、目立つて僕を疎した。僕のやつてゐた級長の役が他の者に譲られたことは無論だつた。又、いつかのやうに、放課後にでも皆んなに何か話をして聞かせ、時には、僕だけに早く家へ歸れと言つた。僕がどんなに上手な作文を書いても、決して賞めて呉れなかつた。修

身の點は丙になつた。その他、一つ一つ擧げてゐては切りがない。僕も又、次第に學校へ行くのが厭になつて、と言つて、家からは學校へ行くやうにして辨當とカバンとを持つて出て、そのまま、山の方へなど遊びに行つた。山には花が咲いてゐて、その花などは僕は嫌ひだつたが、誰もゐない所で數時間を暮したものだ。それが又教師に知れて、この時も前と同じやうに折檻された。

「お前は大きくなつても碌なものにはなれないぞ。」

さう言はれたことを、僕はよく覚えてゐる。時には、なる程さうかも知れないと思つたりした。

四年の年はそのやうにして終り、五年になつたが、その時僕はがっかりした。S教師がそのままで同じく僕の級の受持になつたのだ。益々僕は學校が厭になり、成績の方も今度はほんとうに悪くなつた。國語と算術だけはよく出来たが、その頃教はり始めた地理などは、少しも覺える氣にはなれなかつた。そして一番嫌ひなのは理科だつた。花や蝶々やバツタのことなど、聞いてゐるのが莫迦らしかつた。そしてそのうちに夏が近づいて来て、この時一つの事件が起つたのだ。慥か七月の半ばであつたと思ふ。僕等のクラスはS教師に引率されて、學校からは餘り遠くない、且といふ山へ登ることになつた。海拔では五千尺乃至六千尺の山であらうが、元來その土地が海拔三千尺に近い所だつたので、實は二三千尺の山である。それでも五年生としては頂上まで往復一日はたつぷりかゝつて、それで僕等は朝早く村を出かけ、その十一時に峰へ着いた。深い谷の底に生れて、朝夕山を見て暮らした僕等だつた。が、それにしてもこれだけの高さまで登つたのはこれが始めてで、僕にでもそれは素晴らしい愉快なものであつた。空氣がそこでは冷たくて、胸のすくやうな氣持だつた。見下ろせば、國語の教科書にあつたやうに、T川は銀の帶のやうに流れてゐるじ、村や原や森などが、玩具のやうと見えたり、又は一面に廣い絨氈だつた。たそして何よりも驚いたことには、それまではそこまで行けば向うの變つた谷を見下ろせると思つてゐた峰の奥に、まだく、澤山の峻しい山があることであつた。僕等の登つた山とはその色までが全く變つて、紫色のギク／＼した山肌、峰には雪さへも積もつてゐるのであつた。

僕は、いつものやうに仲間を外れ、たつた一人で、ぼんやりとこの雄大な景色を眺めてゐた。が握り飯を食べて了つてから、何氣なくその邊を歩き始めた。そしていつの間にか皆とは大分離れた所まで来て了つて、だが、S教師がまだ二時間は大丈夫遊んでゐてもいゝと言つてゐたし、それに歸る前には喇叭が鳴ることになつてゐた。それで僕は何も心配をしなかつた。

と、僕等が登つて来た方からは裏側に當る、少ししやくれたやうな斜面へ来た時であつた。その斜面には何かの灌木があちらこちらに生へてゐたが、四五間も下がると、急な斷崖になつて深い谷に臨んでゐた。僕はその崖を覗いて見ようとして、そこにあつた灌木の藪を抜けようとする時、崖の縁に近い所で、向う側の紫色の山肌を背景にして、にゆつと黒い影が立上がった。その影はS教師だつた。

S教師は僕の顔をチラリと見て、そのまま又しても蹲み込んだが、その途端に僕に向つて聲を掛けた。

「B、一人で来たのか。」

「へい、何です？」

何故か僕は嬉しかつた。それですぐに近づいて行つたが、見るとS教師はそこにあつた灌木の根元にロツプを捲き付けそれを傳はつて下へ降りて行くところであつた。

「先生、何か取りに行くんですか。」

と僕は言つたが、彼はそのまま答へずにズル／＼とロツプを下り始めた。そして頭が斷崖の縁から没した所で思ひ付いたやうに言つた。

「R、危いから餘り近づいてはいかんぞ。」

後に分つたところでは、S教師はこの斷崖を三十尺ばかり下つた所に、雲母の層があることを

知つてゐて、これを學校の標本にする積りで採りに行つたわけなのだつた。

危いから近づくなと言はれた僕は、しかしおきにその斷崖のところへ腹ん這ひになり、そつと下を覗いて見た。

實に恐ろしい谷だつた。崖の肌も、それからずつと下の方の平らな所も、眞黒な岩ばかりで出てゐて、ピンと張り切つたロツプだけが、妙に白く眼に映つた。靜かに下がつて行くS教師の帽子と肩が、かう、しーんと沈んで行くやうに見えたものだ。

「先生、何をしに行くんですかア。」

思はず僕が訊くと、S教師は上を振り仰いで、鋭く僕を叱つた。

「こら、R！ いけないと言つたのに何故そんなところへ顔を出すのだ。向うへ行つて了へ。こら、こら！」

僕は又しても叱られたのですぐに顔を引込めようとして、その時に、ふと例のロツプへ眼を留めた。灌木の根から叢を分けて、眞一文字に走つたのが、崖の縁の岩角で鋭く曲り今言つたや

うに、深々と谷底へ垂れてゐるのだ。が、それは恰度岩角に當つたところで、微かに、ピリ、ピリ、ピリ、と音を立て、切れかゝつてゐたのだ。

「ア、危い。繩が、繩が——」と僕は叫んだ。

「え？ なんだと？」下から聲が聞えて來た。

「繩が切れかゝつてゐます！ 先生！」

「え？」

S 教師は吃驚して再び上を振り仰いだ。が、ロップの切れかゝつてゐることが、それを握つてゐた手の響きでも分つたのだらう。忽ち必死の勢で上へ昇り始めた。

僕はハラ／＼してそれを見てゐたが、この時どうしたのであつたらうか、僕の右手には恰度手頃な岩の破片が掴まれてゐた。

こゝで、あの繩の切れかゝつてゐるところを叩いたらどうなるだらう。ふと僕はそんなことを考へた。

S 教師は、その間に五六尺上つて、崖縁まであと二十尺ばかり近づいてゐた。懸命な努力で焦つてゐた。

と、僕が突然、ロップの切れかゝつた所を、下の岩を壁にして、ガチン／＼と叩き始めたのである。

「や、B、貴様何をする！」

僕は答へなかつた。猶も續いてロップを叩いた。今もよく覚えてゐるが、ロップは數本の細い麻繩を、更に一本の太い繩に纏り上げたものであつた。だからよく見ると、先刻切れ始めたのは、そのうちのたつた一本が、それもまだ完全に切れてゐないのだつた。

僕はしかし、もう無中になつてそれを叩き切つてゐた。手に掴んでゐた岩が尖がつてゐたので、見る／＼二本ばかり切つて了つた。

何か頻りに喚く聲がした。そしてその聲はだん／＼に下から僕の鼻先へ近づいて來た。

顔を上げて見ると、もう四五尺でS教師の手が崖の縁に届かうとしてゐた。が、疲れたのであらうか、進み方は大變に遅くなつてゐて、只、聲だけが／＼と僕の耳に響いた。

「貴様、うぬ、な、なにをするんだ！」

「許さんぞ貴様、B、Bつたら！」

が、僕は猶もロップを叩き續けた。

そしてS教師は、五寸、六寸づつ上へ昇つて来た。

やがて、ピツ！といふ音がしてロップが切れた。途端に、これこそは死を期したS教師の最後の努力でもあつたのだらう、不思議にもその両手がパツと崖縁の岩にかゝつた。そして、だが、それは親指までかゝつてはゐなかつた。両手共、僅かに四本の指が爪先だけかゝつただけであつた。彼は渾身の力を籠めて、その指先きでぶら下がつた。

僕はスルリと横へ逃げて、そこから首を突き出して見た。S教師の両脚はぶらりと伸びてぶら下がつて、だから、折角指をかけたものゝ、そのまゝどうにもすることが出来ないらしかつたが、ちつとその指先きを見てみると、それがほんの眼に見えぬくらゐづつ、ぢり、ぢり、と深くかゝつて行くやうだつた。

「助けて呉れ！」

とS教師は叫んだ。そして僕は例の石で僅かにかゝつてゐた八本の指の爪を叩き始めた。

「ウワツ！」

と、この最後の叫び聲と、そして僕が爪を叩いてゐた時の彼の恐怖に充ちた顔と、その二つを僕は未だに忘れることが出来ないのだ。やがて遙かの谷底で、鈍い音がしたかと思ふと、僕は手に

に持つてゐた石をボンと撒げ捨て、こつそりと其の場を立去つた。

第一の殺人は、かくして突然に行はれたものだつたのだ。それから後一時間程して、一緒に行つてゐた学校の小使が騒ぎ始めて、だが、誰一人として僕を疑ふものはゐなかつた。僕が現状へ近づいたことをすら見たものがないのだつたし、谷底に落ちてゐたロップは、岩角で擦り切れたのだらうといふことになつた。僕は今から考へて、よくも他殺たといふことが知れなかつたと思ふ。

何故なら、自然に墜落したものなら、S教師は多分ロップを掴んでゐた筈ではなかつたか？

又ロップが切れた瞬間に、彼が両手を離れたにしてもロップよりは、身體の方が、先に墜ちて行きさうなものだ。だから屍體の上にロップの一端が載つてゐなくてはならない筈だ。そして少なくとも、崖の上の岩角には、僕がロップを叩き切つた跡が残つてゐた筈だ。或はそれが屍體の指にも――。

僕はその夜から續けて數日の間、S教師の斷末魔の、あの恐ろしい顔を夢に見た。

M君――。

僕が中學校へ入つたのは、それから四年の後であつた。僕は両親にさへ餘り愛されてはゐな

つたと思ふが、家は相當に裕福だつたし、上の兄二人も中學から上の學校へ進んだので、言はゞその情勢で學問をさせられることになつたのだつた。そして、だがこの中學時代も、僕には一向に愉快なものではなかつた。相變らず孤獨で、友達も寄り付かなかつた。又僕も友達を作らうとは思はなかつた。成績は三年級になるまで相當だつたが、その頃から又悪くなつた。上の二人の兄は成績がよかつたのに、僕だけがかうして益々見込みのない人間になつて行つたので、兄達は會ふ度に僕を叱責した。お前は百姓になれと言つた。が、流石の僕も、まだ何かしら自分には天分が有るやうな氣がした。他人は皆僕を此上もなくやくざな人間だと思つてゐたし、外見上はいかにもそれに違ひなかつた。しかし自分自身に見れば、そこにはまだ誰一人發見出來ぬところの、隠れた寶が有るのではないか。——と、實際それは有るやうにも思へたのだつた。學問では敵はなかつたが、僕の眼からは、クラスの首席を占めてゐる男などが、實に下らない平凡な男に見えた。あの男などの全然有つてゐない何物かを僕は必らず自分の中から掘り出すことが出来るのだ、とさう考へてゐたものだ。そしてその末に選んだのが藝術である。僕は中學卒業後、どうにか両親を口説き落して、君も知つてゐる通り、美術學校へ進んだのだ。

等だ。僕の此世に遺すべき作品は、總てグロテスクなものばかりである。普通の意味で言ふところの美は、對象が整つてゐることであるやうだ。が、僕はそれを決して美とは認めない。圓滿な形式が何かの原因でひよつと破綻を來たし、人の心臓をぎゅつと刺るやうな刺戟に變つたところ、そこに僕は不可思議な美を感じるのだ。無論駭蕩たるものではない。戰慄、狂氣、壓迫、さういつたやうなものばかりだ。詳しく言へば際限がないが、要するに僕の狙つたところはそこにあつた。君は充分に理解して呉れるだらう。そしてこのことが又、やがて僕がA先生を殺す遠因にもなつたのだ。——遠因と僕は言つた。君はこの遠因とA先生殺害との間にもう一つ事件のあることを當然想像するに違ひない。

その通りだ。

僕はA先生より前に、當時新進畫家として賣り出してゐた君も個人的によく知つてゐた筈の、あのEを殺して了つたのだつた。

Eが奇怪な死を遂げたこと、そしてそれが他殺らしいとは思はれながら、遂に犯人が擧がらなかつたこと、いや、一時はその嫌疑がA先生へかゝつたこと、これ等は凡て君の知つてゐるところ

ろだ。が、その犯人が僕であつたとは意外だらう。
僕も、A先生のことを後廻しにして、Eのことから話して行かう。

M君——。

思つて見れば、この僕を中心にして、君やEやA先生や、そこには不思議な因縁があるではないか。五年前のことではあるが、あの二人を僕に紹介して呉れたのは君だつた。君とは、それ前から君が犯罪を中心にした小説を書いてゐて、それが僕との間の一脈相通するものとなり、親しいといふ程でもなく交際してゐたが、あれは秋で、碧洋會の展覽會が開かれた二日目であつたが會場下の喫茶店へ行つて、そこでA先生とEとに紹介されたのだ。君に宛て、かうした手紙を書くといふのも、して見れば、満更無意味なことではなくなつて来るね。

當時の僕は、畫家として實に不遇なものだつた。僕の繪を誰も賞めて呉れる人がなかつた。僕の繪は只怪奇なだけで、美がないといふ評判だつた。甚だしい時には、怪奇どころか汚いだけだといふ人もあつた。内心で僕はそれ等の批評を輕蔑したが、財政上僕はひどく苦しまねばならなかつた。そしてその爲には、あらゆる端の口實を借つて知人の間を廻つて歩いてゐた。この點で君にも迷惑を掛けてゐるが、僕は遂に秘密出版物にまで手を出して、而もそれすら金を貰つてゐる。ば、殆んど約束を果したことがなかつた。僕の人格が全く零だと言はれたのはこの頃からだ。——が、その時に當つて、君がA先生を紹介して呉れたのは、實に有難いことであつた。あの鋭い批評眼を有つてゐるA先生、この人に直接近づけさへすればどうにかなる。僕はそんな風に考へたのだつた。事實又、それまでは僕とA先生との間に種々な障礙が存在してゐて、殆んど故意に、僕の作品は先生の眼から遠ざけられてゐたのである。

——紹介された時、僕はA先生のことばかり考へてゐて、Eのことなどは眼中になかつた。そしてそのEを、やがてどうしても殺さずにはゐられなくなつた。君には僕のその時の心理が、果してどんな風に見えるだらうか。M君、僕は最初には何とも思はなかつたこの男を、それから二度か三度會ふうちに、極端に忌み嫌ふやうになつた。僕はA先生を一月に一度か、又は二月に一度か、そんな割合で訪れてゐた。が、その度に不思議とEにかち合つた。そしてEの顔を見る度に、僕はぞくんとする程奇妙な恐怖を感じたのだ。

Eは非常に端正な容貌を有つてゐた。僕の醜怪さに反比例して、能面のやうになめらかな——あゝ、今思つても僕はぞくぞくするよ——所謂美男型の顔だつた。とかう言へば君は多分僕がそ

の美男である點を憎んだといふかも知れない。が實は決してさうではないのだ。美男なら、E以外に随分知己もある僕なのだが、さうだ、強いて言へば、僕はEの、美男ではあるけれども餘りに無表情なところを嫌つたのかも知れない。と言つて、それでは充分に僕の氣持を説明してはならないやうだ。單にそれだけなら、何もあれ程の恐怖を感じる筈がない。簡單に言へば、極端に性が合はないとでもいふのだらう。僕がA先生のお宅にゐたとする。するとそこへEが訪ねて来て、僕は何故か知らぬが一刻もそこにはゐられなくなつた。あたふたと暇を告げて了ふのだ。五回六回と重なるうちに、僕はEをこの世の中で最も呪ふべき存在だと思ふやうになつた。

分らない、と君は言ふかも知れない。が、僕にはそれで分つてゐるのだ。そして君に分るやうには説明が出来ないのだ。僕はそれから一年餘り経つた時、ふとしたことから巧妙な殺人法を思ひ付いて、遂にそれを實行して了つたのだつた。

で、尤も、このEを殺した時には、自分では氣持の上で充分に理由があると思ひながら、それが言葉に現せないものであるだけに、又一方では何も理由がないやうな感じもあつた。だから愈よ殺人方法を思付いた時にしても、すぐには實行にかゝれなかつた。僕の腹の片隅には、何か知ら一向に煮え切らないものが残つてゐて、僕は極めて荷厄介な感じを持餘したのだ。是非とも殺さねばならぬといふ程の決心があるでもなく、と言つて、では單なる妄想かといふにさうでもないかつた。こんなことを考へてゐても、結局は彼を殺すだらう。と、こんな風に思つたりして愚圖々々と二ヶ月ばかり過ぎして了つた。

そして、その妙ちきりんな不透明さのうちにあつて、僕はひそかに機會を窺つてゐたのだ。序でに言ふが、僕の考へた殺人方法といふのは、Eが常に愛用の刻煙草ダールハムをストロウ紙に捲いて喫ふのを利用したものだつた。そして、僕の氣の付いたところでは、彼はいつもそのストロウ紙の束を藏ひ忘れて、チョッキのポケットへ入れて見たり、上着のポケットへ入れて見たり、貰を喫はうとする度にあちらこちらを探すので、そこが大變便利であつた。と、かう言つても君にははつきりそれが呑み込めぬかも知れぬ。が、それはそれでもよいだらう。後をよく讀んで貰ふことにして、兎に角僕はさうした方法を選んだのだ。そして前言つた不慥かな氣持でゐるうちに到頭その機會が來たのだつた。

それは雨降り揚句の、空氣の濕つた三月の夜だつた。僕はその夜A先生を訪ねて行つた。行つて見ると家中に書生も女中も奥さんもゐなかつた。A先生として、これは珍らしいことでないのを君も知つてゐるやう。奥さんは時々書生や女中達と一緒に引連れて活動だとか寄席だとかへ出掛

けるので、先生一人が留守番になる。そしてかうした時には、訪問者は玄關の呼鈴を押して、その返事が聞えたら、勝手に先生の書齋へ上がつて行つてもいいことになつてゐるのだ。で、この夜も矢張りこれであつた。上がつて行くと、先生は中庭に面した書齋で、ミミイと呼ばれる白い毛並の肥つた猫を膝に乗せて、古ぼけた和綴ちの本を讀んでゐた。

「スケッチ帖ですが、一つ見て戴けますか。」

「さう、そのうちに拜見します。」

いつもこの調子だつたが、僕はそこで持つて行つたスケッチ帖を、遠慮勝ちに書棚の横へ置いて来て、暫くもぢく〜と坐つてゐた。元來が口数の少い人ではあつたけれど、この時もそれつきり先生は黙つて了つて、僕のゐることなどは忘れたやうに、頻りに本を讀み出したのだつた。仕方なしに僕は間もなく暇乞ひをしたのである。

が、さうして僕が、來た時と同じやうに、一人きりで玄關へ來て、それから靴を穿いて外へ出た時であつた。

僕はそこで、思はずドキリとしてゐた。

向うから門燈の明りを斜めに浴びて、Eがまるで約束したやうにやつて來たのだ。

Eはこの時、カールバーを腕いで左の腕に掛けてゐた。僕がゐるのを知らぬやうな無表情な顔で、軽く頭を下げたまゝ、玄關の方へ行かうとする。僕は何かしなくてはならぬやうな氣がした。そして彼が僕の傍を擦れ違つて行かうとした時に、いつの間にか手にしてゐたストロウ紙の束を、彼の上着の右のポケットへ入り込ませた。その僅かな所作を、彼は全く氣付かなかつた。僕は彼が玄關の中へ這入つて了ふと、足音を忍ばせて中庭へ廻つた。結果を見て置かなかつては氣が濟まなかつたのだ。

僕が靜かに先生の書齋へ近づいて行つた時、Eはもう挨拶をして了つた後であるらしかつた。百日紅の蔭から硝子戸越しに、先生が相變らず先刻の本を讀んでゐて、傍にポツンとEの坐つてゐるのがよく見えた。ミミイも先刻のまゝで丸くなつてゐた。

それは、動きのない繪のやうなものであつた。そして能面のやうなEの顔が、例の無表情なものなので、僕にはそれが死人のやうに見えた。

と、Eが僅かに上體を動かして、右手で胸のポケットを探り始めた。そして次には上着のポケットへ手をやつて、あの手帳型になつてゐるストロウ紙の束を取り出した。同時に黄色いゴム製の莫入を、これは左手で内ポケットから掴み出し慣れた手付きでストロウ紙を一枚剥ぎ取り、そ

れにダルハムをサラ／＼とあげた。

僕は、胸をドキ／＼させた。僕が彼のポケットへ投げ込んだのには、その最初の一枚のストロウ紙に、糊の部分を含み出さぬやう、激毒×××××を塗つて置いたのだ。極微量を以て人を殺す×××××である。彼が今右のポケットから取出したところを見れば、それは明かに僕が投げ込んだ奴に違ひなかつた。ダルハムを捲く爲に、それを舐めさへすれば彼は死ぬのだ。

ふと、僕はあのポケットに二冊のストロウ紙、元來彼が持つてゐたのと、僕が迂り込ませたのと、その二つがあつて、彼の取出したのはその實、毒の無い方の奴かとも思つた。

が、さうではなかつた。

彼がくる／＼とダルハムを捲いた後、ストロウ紙の一端を舌ですつと横に舐めた。その時バチバチ眼瞬きをしたのであつたが、それは舌が何かの刺戟を感じた證據であつた。そして、だが彼は何も氣が付かなかつたのだ。そのまゝゴクリと唾を嚥み込んで了つた。ポカ／＼とそれを喫ひ續けて、やがて喫ひ残りをポンと火鉢の中央へ投げ入れた。そして、それが全部灰になつたかと思ふ頃、

「……………」

を離した。

「どうしたのだね、E君。」

靜かに先生はかう言つた。が、それはもう遅かつたのである。何事もない様子なので、先生が再び本を読み始めようとした時に、Eの唇からはつらくと、血が流れ出したのだつた。

そしてそれは、Eの相變らず無表情な顔であつた。只、赤い血だけが二三本顎の方へ垂れて來ただけであつた。

そのまゝ、ゆらりと彼の身體が横へ傾いた時、僕は慄然としてその中庭を飛び出したのだつた。

M君——。

もう丸二年、足掛け三年にはなることである。が、君はあの頃のことをまだ詳しく覚えてゐるであらう。

新進畫家Eの死は、世間へ相當大きな衝動を與へたものであつた。彼は恰度某女と結婚すると

いふ間際でもあつたし、それが自殺するとはどうしても考へられぬところであつた。屍體を解剖すると、毒薬×××××を嚥下したことが分つた。薬の性質から判断して、それは少くとも彼がA家を訪問したその前後に嚥んだものらしいと言はれた。

僕はこの時多少心配してゐた。ストロウ紙の束には、最初一枚だけに毒薬を塗つて置いたし、而もそれはEがその喫ひ残りを火鉢に投じたことによつて、完全に灰となつて了つた。だから、例へ彼の服から二冊のストロウ紙が発見されたところから——事實では四冊発見された。彼は案外ずぼらで、僕があれを入れる前に、三冊持つてゐたのである。恐らくは、自分でも常にストロウ紙を藏ひ忘れることを知つてゐて、それでその三冊をあちらこちらのポケットへ入れて置いたものであらう——何も危険は無い筈だつた。が只一つ、當夜僕がEと入れ違ひにA家を辭したことが、何かの端緒になりはしないかと思つた。それで何となく氣が落着かずにあつたのだつたが、間も無くその嫌疑は、寧ろA先生の方へかかつて行つた。

「さあ、當夜は僕以外に家の者が誰もゐなかつたので都合が悪いが、Eが來てからどの位経つたか僕は覚えてをらん。三十分か一時間、いや、來てからすぐではなかつたのかね——」
先生はかうした曖昧なことを言つた。それに、後に分つたが、先生は僕の當夜訪ねて行つたことをすつかり忘れてゐた。これも又先生としては有りさうなことだが、兎に俄そんな都合で、先生の答辯が曖昧だつたことは、當然其筋の注意を惹いた。先生は二三度繰り返して訊問を受

受け、だが、結局この事件は有耶無耶になつた。

僕は完全に嫌疑を免れたのだ。

そしてそれから一年半ばかり、僕には割合に幸福な日が續いた。

「僕は、君のやうな人にこの天分のあることを不思議だと思ふ。いや、或は君だからこそこれだけのものが出来るのか知らないが、兎に角君の作品に對しては尊敬する。君の作品には、ゴヤとかムンクとかいふ人達のやうな怪奇美がある。」

或る時、A先生がかうしたことを言ひ出したからである。この言葉の裏に、僕は先生が矢張り僕を愛しては呉れないといふことを知つた。が、それでも僕は満足しなければならなかつた。ムンクやゴヤこそは、當然僕の狙ひ所だつた。僕自身が誰からも愛されないことは、今に始まつたことではない。僕を離れて、作品さへ認めて貰へれば充分なのだ。

無論そのために僕は、物質上でも以前よりはずつと恵まれるやうになつたのだつた。そして順當に行けば、今頃は個人展覽會でも開いて、又一段と名聲を馳せる時期になつてゐたのだ。それ

が遂に、A先生を殺すやうなことになるうとは！
僕は愈よそれを語らねばなるまい。

M君——。

君はこの後、どうかした機會で僕の事件に關する公判記録を讀むこともあらう。そしてその場合には、公判決定理由書中で、多分次のやうな文句を見出すだらう。

「……被告Bハ從來Aの庇護ヲ受ケテ畫壇ニソノ地位ヲ占メ來リシモ、最近Aノ反感ヲ買ヒ、ソノタメニ次第ニ又地位ヲ失ハントセリ。爾來彼ハAヲ恨ムノ念強ク、遂ニ——年七月頃ヨリ殺意ヲ生ジ……」

これは僕が公判廷で陳述した通りなのだ。僕はその時、Eを殺したことについては、一言もそれに觸れなかつた。向うで少しもそれを訊ねなかつた。然るに、それでは、そんなことを申立て、置いたのであつた。知らなれども全然の嘘ではない。去年の七月頃、先生は急に僕を疎んじ始めた。が、その疎んじの前といふこと、それ自身に全く別な理由があり、同時にそれが又A先生を殺す理由にもなつた。これだ。

縣秘から誦さう。

君は僕が去年の六月下旬「死の倒影」といふ繪を

たことを知つてゐるか？ 多分知るまい

と思ふが、これは一人の非常に端麗な僧が、沼の畔に立つてゐる。それを描いたものなのだ。僕はカン、カン、カンの四分の一に、岸の一部と、ぶら下がつてゐる僧の足頸だけを現し、下部四分の三で、水に映つた全身を描いた。自分でも近來にない傑作だと思つて、出来るかとすぐにそれをA先生の手許へ持つて行つた。

「さう、いつか又拜見します。」

僕がもうこれだけ名を成すやうになつても、先生は例の調子だつた。僕はそのまま歸つて來たが、月を超えて四五日目のこと、僕は思ひ懸ず先生の訪問を受けた。

「先生、先日の繪のことでせう？」

僕は勢ひ込んでから言つた。出來榮えが素晴らしかつたので、先生がわざわざ出向いて僕を賞めに來て呉れたと思つたのだ。

「さうです。」プツリと先生は答へた。

「で、如何でせう。僕は自分自信を有つてゐますが——」

「出来榮えはいゝです。が——」

——がと言つたきり、先生は暫く喋らなかつた。そしてやがて靜かに言つたのは次のやうな意外な言葉だつた。

「君は、E君が僕の家の書齋で死なれた時、慥かE君と入れ違ひに歸つて行つた筈だつたね。」

「はア——」

僕は何かかう、非常に困惑した氣持だつた。先生が突然どうしてあの時のことなどを言ひ出したのか分らなかつた。そこには明かに何か陥穽らしいものがあつた。僕はそれを見極めようとして一心に焦りながら、はつきり見當が付かなかつた。

なるべくは作つた嘘を言はないやうに。だが、さうしては又悪いのか知らず？

「で、あの時に君、君はすぐに歸つて行つて了つたのかね？」

「は、慥か、すぐに歸つたと——」

「はつきり思ひ出して見給へ。え、歸つたのか、歸——いのか？」

「一歩づつ、僕は陥穽に近づくことを意識した。胆へ急に大きなヴェールが垂れ下がつて、そのヴェールのために何もかもが、もや／＼と隠されたやうな氣持だつた。そしてそれが無性に僕の前を過ぎた。が、思ひ切つて答へたのだ。」

「歸りました。すぐに歸つて了りました。」

「きつとだね、間違ひはないね？」

「え、ええ——」

「歸ると見せて、庭の方からでも書齋の中を覗いてをつたのではないのかね？」

「いえ、そんなことは——」

「無いといふのか！」

突然先生は大きく嘔鳴つた。先生がこんなにも大きな聲をする人だとは思はなかつた。僕はハツとして顔を伏せたが、頭の中を種々考へがごつちや混ぜに通り過ぎた。何を、どんなことを、この僕は遣り損なつたか。どこにも手落は無かつた筈だ。が庭へ廻つてゐたことは知られたらしい。そしてそれは當然僕を怪しませるに足る行動だつた。とは言へ、それは又何故なのか？

僕の頭の上では、再び以前の靜かな口調に戻つた先生の聲がした。

「B君、君はそれ程莫迦な男なのかね？」

「な、なぜです？」と僕も弱味を見せまいとして顔を上げた。先生の眼瞼がちつと動かずに僕の

方へ向けられてゐた。

「君はまだそんなことを言つてゐる。分らないのかね？」

「分りません。先生の仰有る意味が全然何のことだか分りません。」

「さう、ぢやア仕方がないから説明しませう」

先生は不機嫌な顔で、しかし口調だけは相變らず静かだつた。

「僕は、君に説明をしなくてもいいかと思つた。そしてなるべくはあまり露骨なことを言はずに、君の反省を促がして歸らうと思つた。が、君の態度には、この僕が見てみると、却つて僕の方が氣恥かしくなるやうな圖々しさがある。よろしい、説明しませう。僕はねB君、實は今日まですつかりその事を忘れてをつたが、今日になつて漸くあの晩に君がE君より前に僕を訪れて來てゐたことを思ひ出した。あの事件では僕も一寸調べられて、それでもそのことは忘れてをつた。が、そこでふいにこれを思出させて呉れたのが、先日君の持つて來た「死の倒影」だつたのだ。そして先刻それをちつと見てゐるうちに、だんぐ譯が分つて來たのだ。」

「……………」

「つまりだね、僕は君がああ繪の中へ巧妙に押し隠して置いたものを探り出したのだ。成程あれ

は普通の人が見たのでは分らないだらう。一寸見たところでは全然違つてゐるやうだが、君も僕の眼を誤魔化せるか否か、それを不安には感じなかつたか？ 肉を着せ皮を蔽せて、あれだけに變へたものではあるけれど、少くとも素描には明らさまにそれが現れたに違ひないのだ。」

僕にはかう言はれてもまだ意味が分らなかつた。

「な、なんのことです、それは——？」

「どうしても僕の口から言はせようといふのか——」先生は微かに溜息をした。「つまりだね、あの水に映つてゐる縊死をした僧の顔だ。今言つたやうに、一寸見たばかりでは分らないけれど、あの僧の顔は君、E君が口から血を垂らした時の顔と同じだねえ。」

「えー！」

僕は慄へ上がった。

頭がつーんと氷のやうに痺れて了つた。

あれが、あの繪の中の顔が、Eの死際の顔になつてゐるやうとは！

先生は僕の顔をちつと見てゐた。そして、嚴肅な聲音で言つた。

「君は先刻、あの時僕の宅からすぐに歸つたと言つたやうだが、嘘を吐いても駄目だつたね。君

は當夜、慥かに窓の外から覗いてゐたのだ。そしてその時の印象が今度の「死の倒影」として纏まつたのだ。僕はあの時、E君が例の動かない顔のまま、ゆらりと横に倒れて行つた、あの刹那にE君の様子の變つたのに氣付いたのだが、唇からは赤い血が垂れてゐてそれは無表情なだけに凄かつた。ね、僕はその顔を君が捕へたことを豪いと思ふ。完全に君はあの凄さの要素を掴んだのだ。この點には僕も敬服しよう。が、何故に君はそれを覗いてゐたか？ いや、僕にはよく分つてゐる。君は元々E君があつた死方をするのを豫想してゐた。言ひ換へると君はあの「死の倒影」を描く爲に、E君の命を犠牲にしたのだ。モデル、——恐ろしいモデルを君は選んだのだ。」

この最後の言葉、それは餘りにも僕を善良に解釋したものだつた。先生は、僕がその目的でEを殺したと思つてゐたのだ。が、それにしてもこれは恐ろしいことであつた。

先生は悲しげな口調で言つた。

「B君、僕は君が善人であつて、それでゐてあれだけの悪の美を描き出すことが出来たら、どんなによかつたらうと思ふのだ。不幸にして君はさうでなかつた。そしてあの繪は、君の悪人であることを現すだけに過ぎなくなつた。が、僕はさうは言つても、前々から言ふやうに、君の天分

だけは驚嘆し度い。どうか君、善人に歸つて呉れ給へ。僕があの繪から君の犯罪を見付け出したのは、結局、あの繪を値打ちづける上に役立つのだ。君は藝術のために殺人を犯した。が、それが罪でないとは言ひ得ないだらう。君は立派に自首し給へ、告白によつて、あの繪が有つてゐる君の罪を清めるのだ。僕はそのためになんぞこゝへ來たのだつた。自首した後で、僕は君の不朽の名作を世に出して上げよう。」

先生はやがて歸つて行つた。自首する迄は僕に會はないといふこと、その代りにはその時まで決して先生の口からはそれを口外せぬこと、幾度も念を押してそんなことを約束しながら歸つて行つた。

何といふ意外な、不氣味な結末であつたことか。

僕はその夜、殆んど一睡も出来なかつた。部屋の中を眞暗にしたり、又は煌々と電燈を灯して見たり、どうにも眠ることが出来なかつた。眼を塞ぐと、そこに僕は曾て味はなかつた戦慄を感じた。僕の室の中へあの不可思議なEの顔が充ちく／＼して、それは床から天井から書棚の蔭から、無際限に湧き出しては重なり合ひ、犇々と僕の寢床へ押し寄せて來るやうに思はれた。或は又、それらの數千萬の顔が忽ち部屋中一杯の大きな顔に變つて了ひ、それがゆつくりと僕の胸の

上へのしかゝるやうに思はれた。君は僕のやうな男が、このやうにも臆病な一夜を過ごしたことを、定めし意外に思ふだらう。が、それはほんとうのことであつた。流石にその後は一日々々その恐怖に慣れて行つたとは言へ、僕はEの生前に、彼を見るといつも脊筋がスツと冷たくなつたことを思ひ出した。すると今では、その不可解な恐怖がピタリと僕を釘付けにした。僕は殆んど絶望的にEの顔を忘れることに努めたのだ。

が、そこで一方、自首するかしないかといふ現實の問題。こゝまで話して来た以上、君はもう大體の事柄を想像してをられるだらう。僕も一度はA先生の言葉に従つて自首しようかと思つたのだつた。が、それは已むを得ずにさう考へたのであつた。そしてそのうちに、あの「死の倒影」について、それが恐らく先生以外には、Eの顔に似てゐることを誰も發見し得ぬものであることに氣が付いた。又、例へどんなに似てゐたに似たところが、それは決して直接證據になるものでなかつた。

「A先生を殺して了ひさへすればよい筈だ。」

僕は祕かにさう決心したのだ。そして先生には、自首するまで種々準備して置きたいこともあつた。相當の猶豫を興へて呉れるやうにお願ひした。二ヶ月間、僕は先生の門を潜らなかつた。

が、さうして世間には、僕が全く先生から疎んぜられたといふ噂が立つ頃になつて、漸く僕は先生を殺す機會を掴んだのだつた。

その機會、いや機會といふよりは殺人方法が、いかに拙劣なものであつたか、これはもう新聞にも出てゐることであらうし、詳しく言ふにも當るまい。僕は最初Eの時と同様に、毒藥××××を用ひようと思つた。が、先生は菓を喫はぬし、それに後になつて先生の屍體が解剖された時、Eと同じ毒で死んでゐたのでは、何かそこに危険があると思つた。結局僕は、先生を絞殺して置いて、然も自殺と見せかける爲に、屍體を先生のアトリエの天井からぶら下げて置いた。恰も先生が、曾てEを殺したことを悔悟して、その揚句に自殺したかのやうに見せかけたのだ。でも現れて来た。チラと見られたただけだつたのが、僕は不幸にして、一度見られたら容易に忘れられない程醜惡な容貌を有つてゐたのだ。

豫審から公判へ進んで、凡ては僕に不利だつた。A先生と疎隔してゐたこと、そして又、この二ヶ月ばかり、三四年前の自墮落な生活をやつてゐたこと、到頭辯護士も匙を抛けて了つたのだ。

M君——。

これで僕は語るべきだけは語つたと思ふ。

僕が先天的犯罪者であらうがどうであらうが、要するにこれが僕の過去なのだ。そして、今までに嘘ばかり吐いて来た僕なのだが、これこそは偽らない僕の告白だ。

どうせ死ぬなら、早く死んで了ひ度いと思つてゐる。

では、左様なら——。

x

x

x

x

x

x

(筆者補記)

以上掲げたところは、讀者諸君にもお分りのやうに、畫家Bが獄中から友人Mに送つた書面である。事件の經過はこの通りであつたが、そこで筆者は後日譚として、次のやうな一節を書き加へて置き度いと思ふ。

やがて畫家Bは死刑に處されて、それから數ヶ月の後、碧洋會の展覽會へは、Mの手で「死の

「倒影」が出品された。

その時この繪に關した事情は秘密にされてゐたにも拘らず、これは身に迫るやうな鬼氣を帯びた作品であつて、非常な評判となつたのであるが、或る日のこと、この繪の前で三十歳前後の二人の男が、次のやうな會話を交してゐた。

「……どうもよく似てゐるよ。」

「さうさね、さう言はれれば僕もそんな風に思ふのだが、よく見ると矢張り別な人間だし——」
「いや、僕にはそつくりそのまゝに思へるのだ。無論漫然と眺めただけでは分らないが、凝つと見てみると、どうしたつてあれに違ひない。君も僕もまだ子供の頃のことだつた。S先生が且山から戸板に載せられて歸つて来て、村役場の前へ下ろされた時のあの顔なんだ。紙のやうに蒼くなつた、あの凄い顔にそつくりだよ。僕はどうしてか時々あの時のことを思出すのさ。」

筆者はこゝで、BがEに對して感じた不可解な恐怖を、こゝで臆氣に分つたやうに思ふのである。

多分教師Sと畫家Bとは、一見したところでは少しも似てゐなくて、然しその特徴だけを抽象すれば、全く同じ顔ではなかつたのか？

5

11

5

10

コ

ン

ト

老婆四態

その一 老婆と水道

「おばあちゃん、おばあちゃんてば！」

ぐいぐいと肩を揺すられて、村井家の老婆はふつと眼を覺ました。七十五になる中風のお婆さん、膝の上に本を開いて眼鏡を掛けたまゝ居眠つてゐた。

「おばあちゃん、あたちにめがねかちて。」

孫娘の君ちゃんは、祖母の肩に両手を置いて言つた。

「どうします、眼鏡などを——」

「あたちね、おはりしごとするの。いとがはりにとほらないのよう。」

「ホ、ホ、ホ、ホ——」

老婆は笑ましげな聲を立てた。右半身が中風でよくいふことを利かない。辛ふじて歩けるが使ふのには左手が便利だ。左手を不器用に動かして眼鏡を外した。

「あらおばあちゃん、このめがねこわれてる？」

「どうしてなの。」

「あたち、おめがいたいの。みえないわ。」

鼻のとつ端へ老眼鏡をかけて、一生懸命糸を針のめどに通さうとする孫娘に、老婆はも一度聲を立て、笑つた。

「ホ、ホ、ホ、ホ——」

と、そこへ村井夫人がすらりと現れた。美しいが稍險のある顔、何處かへ訪問にでも出る前なのか、黒縮緬の紋付に革のオペラバツク、艶やかな髪が波を打つてゐる。

「まあ、君子さんは！ お針なんぞ持つんぢやありません。」

村井夫人は不機嫌である。君ちゃんの手から針と糸を取り上げて了つた。

「お婆あさん、氣を注げて下さいよ。子供に針なんぞ持たせて危いぢやありませんか。」

「いゝえねえお前、君子があたしの眼鏡を貸して呉れつていふだらう、ホッホ、ホ、ホ——」

5
11

「いゝえ、困ります。おばあさんはいつでも不注意なんです。おばあさんが針を出してやつたのでせう。」

村井夫人はきつと言つて、それでも娘のエプロンをちよつと直してやつて、やがてその場から姿を消した。

午後二時、老婆は茶の間でうつらうつら、又居眠りを始めてゐた。

ゴトンといふ音で半分落ちかゝつた顎をかくんと振つて眼を開く。茶の間に續いた臺所へ午後三日一杯にさし込んで、流し元にはお河童頭、孫娘の肩まで見えた。

「おばあちゃん、おばあちゃん！」

「はいはい、何んですえ君子さん。」

「あたり、ねぎきつてもいゝわねえ。」

「おやゝ、今度はお料理なの。おいたをしてはいけませんよ。」

「うゝん、あたちねぎきんの。」

葱を一本、左手に掴んだ君ちゃんは、姐の上にそれを載せて、仔細らしく小顎と小なる。何んと思つたか、水道の栓を扱つた。

ピタ、ピタ、三和土が低いので水の音は高い。老婆は何故ともなく昔を憶ひ出した。あそこの流し元に、自分も幾度坐つてお料理をしたことか。あの方はお總菜の六つかしい方だった。お氣に入らないと、黙つたまゝで箸を置きなすつた。この家で、昔のまゝであるのはお臺所だけだ。嫁もよくあそこだけ手を付けずに置いて呉れた。――

ふと氣が付く。君ちゃんは何處から探し出したか踏臺を持つて來た。棚の下にそれを置いてよちゝと攀ぢ登つた。棚の上の出双がキラリと光る。老婆はあつ！と聲を立てた。

右足を不自由に引き摺つて、老婆は流し元へやつとこさ身を運んだ。

どたん！

君ちゃんが踏臺から落ちると、すつと空を切つて出双が降ると、そして老婆がぼつたり倒れるのが、狭い場所で同時に起つた。

わーん、君ちゃんは聲を限りに泣いた。

「おゝ、どれ〜。」

老婆は言はふと思つたが口が利けなかつた。もがいて、起き上らうとしたけれど出來なかつた。

「あわ、あわ。」そんな風に聲を立てた。
仰向けに倒れたのが水道の下で、三和土にべつたり脊を付けて、顔の上から水道の水が落ちた。

だゞだゞ、だゞだゞ、水は間断なく老婆の口へ落ちてゐた。

十五分後に村井夫人が歸宅した時、小さい君ちゃんはまだ泣いてゐた。母親の顔を見ると餘計に泣いた。

「どうしたの君子さん！ あ、あなたおてゝを切つたのね、あらまあひどい！」

折悪しく大きな子供達は皆學校に行つてゐた。女中の一人は外へ出て、一人は夫人がお伴に連れて行つた留守中の出来事。君ちゃんの小指は、根元からぶつとりと切れてゐたのだ。

で、臺所の流し元に、もうすつかり冷たくなつてゐた老婆に就いては、村井夫人も村井氏も、老婆が孫娘に怪俄をさせた申譯に、覺悟の自殺を遂げたものとしか信じられなかつた譯である。

お葬式は翌々日に行はれた。

その二 老婆とアンテナ

おいしは六十四である。田舎で生れて田舎で年を取つた。つい去年までは稲扱のお手傳ひをした程で、大變丈夫なお婆さんだ。指などは小若い百姓よりずつと節くれ立つて太い位だ。

ある晩、總領夫婦と口争ひをした。おいしの方に理がなくて忽ち言ひ負される。その揚句、東京にゐる二番息子の準平が戀ひしくなつて、どうしても東京へ行くと頑張り始めた。

「きく、お前が言ひ過ぎただ。おつ母様の前に手をついて謝つて来い。」
さういふ聲を襖越しに聞いて、おいしは餘計我を張つた。總領の嫁が叮嚀に謝つたけれど諾かなかつた。

「なに、わしは謝つてなど貰ひ度くはござんしねえ。おきくには理屈があるでな、わしが負けたことにして置きますだ。」

「ねえおつ母様、わしも言ひ過ぎたしきくだつて悪い。きくにはわしが後でよく言ひ聞かせるで、もうそんなに大きな聲をしねえでくれや。」

「大きいのは地聲でござんす。悪かつたらわしが謝りますだ。親に謝らせたらお前も氣持がいゝ

5
16

づら。準平のところへ行けばな、お前様達夫婦は氣樂になれるで、まあ、さう止めずに置いとくんなんしょ。」

「準平のところへは、また暇になつたらわしが連れて行きます。おつ母様はまだ汽車に乗つたことはねえし、危いづらに。」

「いんえ、わしだつて一人で行けます。こんな家にはもう一時でも居ることは出来ましねえ。」
 おいしは、丁度準平から東京見物に出て来いといふ手紙の来てゐた折でもあるし、いつさう氣が強くなつてかう言ひつゝのつて了つた。

「そんなに言ふなら明日にでも出かけるがいゝだ。おきく、準平のところへ電報を打つて来い。母、明日一番で立つ、かう打つのだ。」

到頭、總領息子も腹を立て、かう言ひ捨てたまゝ奥の部屋に這入る。で、次の日の朝おいしは信玄袋を肩にして、汽車に乗り込んだのである。

汽車に乗つてしばらくすると、おいしは少し悲しくなつた。始めての一人旅といふばかりでなく、何だか途方もない失敗をした様な氣がして來た。もう準平のところへ行きつきりに行つてゐるといふ氣もあつて、善光寺詣りの費用の積りで貯へてあつた二百圓も持ち出して、當分要るだけの蓄積も持つて來た。が、段々に減つて來た。さうして、總領の嫁の小憎いことを一生懸命憶ひ出して

すぐに歸らうか、或る時はさうも思つた位だが、總領の嫁の小憎いことを一生懸命憶ひ出しては、その氣弱さに打ち勝たうとした。

三十五錢の辨當を買つた頃は、それでももう東京の方が近くなつた。お辨當のお菜の残つたのを、ちやんと始末して信玄袋に入れて了ふと、何だか妙に氣が落ちつく。準平のところへ兎に角行つて見た上で、それから歸つたつていゝづら、さう思つて窓から移り變る景色を眺めるだけの餘裕が出来た。

そして、愈よ東京へ着いて見ると、おいしはほつと安心して了つた。準平は昔ながらの愛くるしい臆を浮べて自分を迎へて呉れるし、寄席や浪花節もすぐ近所にあつた。天井といふ御飯は、見たことも聞いたこともない程おいしいものであつた。汽車の中で、何故あんなに氣弱いことを考へたか、おいしは時々自分の心を可笑しく思つた。

だが、おいしのこの喜びは長く續かなかつた。十日、二十日、一ヶ月の終りになるとおいしは東京に飽き飽きして了つた。何故と言つて、準平が外出すると後はおいし一人きりである。田舎と違つて無駄話しに來て來れる人もない。準平が歸るまで、ちつとしてゐるより他ないのであつ

た。それに、もつと悪いことがある。おいしが準平に氣を許せなくなつたことだ。

「おつ母さん、今夜會社の人達が集つて宴會をやるんですがね、お金を貸して呉れませんか。ええ、十圓要るんです。」

準平が最初にさう言つた時は、十圓の會費は少し多過ぎると思つたけれど、持つて來た二百圓のうちから快く出してやつた。

「おつ母さん、今度縣人會があるのですがね、五圓はかし貸して下さい。今月末には會社のボーナスが出ますし、おつ母さんにもお小使ひを澤山あげますよ。」

二度目にも、快く出してやつた。

なんだかんだと言つて、準平の手へ凡そ五十圓ほど渡して了つたが、月末になつてもボーナスはどうなつたのか、準平は三日程家へ歸らなかつた。

心配してゐると、四日目の朝になつて準平は蒼い顔で歸つて來た。

「おつ母さん濟みません。ボーナスがあんまり少いのでやけを起して了つたのです。堪忍して下さい。その代りにね、おつ母さんがいつも留守の時は退屈だつて仰有るから、ラジオを買つて來ましたよ。」

「……」
おいしは呆れて返事が出來ない。

「これはアンテナつてものです。レシーバーつてものは後で買つて來ます。」

準平に、果たしてラジオのセットを全部買ふ意志があつたかどうかは解らない。おいしの御機嫌をとるために、田舎者にはちよつと珍しく見える銀色の針金だけを買つて來たのかも知れない。兎に角準平は、そのギリギリ光るアンテナ用の針金を、壁の帽子掛へ投げる様に引掛けて、再びふいと外出して了つた。

おいしは泣きたくなつた。もう準平を信じることは出來ない。このまゝであると、いまに二百圓を皆取られて了ふだらう。田舎の家へは、あれだけ立派な口を利いても來たし、せめて三月位は東京にゐてから歸り度い。あゝあ、來るのぢやなかつたによ、おいしはどうしていゝか、途方に暮れた。

で、さしづめ残りの金を取られない算段をしようと思つた。準平から言はれれば、口の巧まささに釣られてどうしても出してやることになる。隠して置いて、失くして了つた。さう言ふより他に無いと思つた。

何處に隠さうかと思つて、あちこち探さううちに天井へ目を付けた。机をあそこまで持つて行つて、天井板を一枚押し上げよう。あそこなら大丈夫だ。

机に乗つたが天井へは手が届かない。本箱から洋書を出して積み重ねた。やつとのことで新聞紙に包んだ紙幣束を隠すと、天井板を元通りに直し、本の上から足を下ろさうとしたが、その途端である。洋書がつるつと滑つておしいは前へよろけた。

準平が帽子掛へ掛けて行つた買つたまゝのアンテナ線、ぐる／＼大きな輪に巻いたのが、どうしたものか二本の釘に渡つてゐて、おしいはそこへ自分の頸を持つて行つたのである。バタ／＼、バタ／＼、おしいはしきりに腕いた。

× × ×

田舎から兄が来た時に、おしいが家をどんな工合で出て来たかは解らなかつたけれど、矢張り自殺の理由はぼんやりしてゐる。

「なあ準平、おつ母様は百五十圓を失くしたのかも知れねえぞ。それで氣を落したんづらい。俺ア、おつ母様を東京へ寄越すのぢやなかつた。」

「さうですね、さうでせうよ。」

準平はさう返事をして、涙をぼろ／＼零してゐる兄の顔を見てゐた。それにしても、まだ百五十圓あつた筈だつたのに、惜しいことをしたな、とそんなことを考へてゐた。

その三 老婆と鼠

七十といふ年を聞いて、源六婆さんはめつきり弱つて了つた。

その年の春のお彼岸には、それでもまだお寺詣りに行くことも出来たし、お萩を作つて佛壇に供へるだけの元氣があつた。

お盆になると、もうとてもそれが出来ない。お墓へ魂迎へに行くのがやつとのことで、お供へものも碌に作らなかつた。雨戸を閉めきりにして、寝てゐた方が樂であつた。

お婆さんのほんとの名はたきよといふのだが、村の人達は誰もたきよ婆さんとは呼ばない。源六婆さん、それで通つてゐる。無論、源六といふのはこのお婆さんの連合で、今から二十年前に監獄で死んだ。死刑になる前の日に、どういふ隙を見出したものか、自分で首を縊つて死んで了つた。で、それ以來、お婆さんは一人つきりで淋しく暮してゐた。

「源六だよ、あいつはまあ死ぬところで死んだつてものだ。だが、源六婆さんもよ、どうせ碌な

死に態はしまいてなあ。」

村の人達はどうかするとこんなことを言つた。

お婆さん夫婦が、どれだけ慘虐な性質を持つてゐたか、また、その一生涯のうちにどれだけの悪事をして来たか、それはわざとこゝには言はないが、源六が監獄で首を縊つて死んだ時、お婆さんもまた監獄にゐた。源六のことを聞かされて、しなびた唇をびく／＼と動かされただけだつたさうだが、兎に角、その後二年してお婆さんは娑婆に出て来た。

「わたしもな、年は取つたし、今迄の業がつくづく恐ろしくなつた。村の人には憎まれたくねえ。これからせいぜい佛いぢりでもしますでな、お仲間にして置いておくれなよ。」

海岸にあるその村へ、お婆さんは歸つて来るとすぐにさう言つた。逢ふ人には誰にでもさう言つて眼をしよぼつかせた。

事實、お婆さんはその積りだつた。連合の源六さんのことにしても、考へれば考へるほどあゝした死に態をするのが當り前だと思つた。で、それだけにまた源六爺さんがいとほしく、朝晩のお勤めも十分に、せめて大叫喚地獄とやらへだけは行かせ度くないと念じてゐたものだが、自分が死んだら、いつたい誰がお水を上げて呉れようぞ、生きてゐる間、さうだ、老いさらばへ

た自分の息が續く間だけでも、後世を願つて置かずばなまい。お婆さんは出来るだけ、現世の悪業を薄くしたいと思つてゐた。

お婆さんがその積りになつたけれど、村の人達は對手にしなかつた。

「源六婆アめ、何をぶつ／＼言つてるんだろ。」

「お經だによ。佛心が出たのだによ。」

「なにを鬼婆め。年をとつたからいゝ様なものの、あれでまだ何をするか知れやしねえぞ。」

村の人達は誰一人お婆さんを信じるものはなかつた。

駐在所の巡査からの言葉もあつて、村の人はお婆さんを追ひ立てなかつたし、畑を賣つた金がいくらか手に有つたので、お婆さんはたつた一人きりでも、まづ、食ふには困らずにゐた。

で、七十になつてその年の夏、お婆さんはひどく弱り込んで来た。どうせもう、村の人に交際つて貰はふといふことは諦めてゐたけれど、源六爺さんのお墓参りは續ける積りだつたのが、今はそれも出来ない。お向ひにある米屋へ、米を買ひに行くのがやつとこさで、一週間位ぶつ續けに、寝通したこともあつた。

寝る日の方が多くなつた頃、お婆さんはふと大きな慰めを見出した。壁の穴や、押入れの隅か

らちよろ／＼、ちよろちよろと出て来る鼠である。鼠とお友達にならう。お婆さんはさう決心した。

鼠はなか／＼人に馴れなかつた。追はないものだから、段々圖々しくはなつて来るけれど、お婆さんがちよつと身を動かすと、パアツと逃げ散る。お婆さんが眠つたふりをしてゐると、大膽な奴が枕元へ来る。時によると皺だらけの顔の上まで昇つて来る。それでも眼を覺ますと忽ち逃げた。

だが、一週間経ち十日経つうちに、鼠共はお婆さんを次第に信賴して来た様に見えた。ほんとに信賴したのか、それとも見くびつたのか、それは誰にだつて解らないけれど、兎に角、鼠はお婆さんを怖がらなくなつた。寢床で、お婆さんがもぞりつと身を動かすと、鼠はきよろつとして、首を振るけれど。たつた二尺程走つただけでこちらへ向き直る。おどけて鬚を搔いて見せる奴もゐた。

お婆さんが喜んで、枕元へ集まる五六匹の鼠のために、切ない身體を動かしては何かと餌を集めて置くと、鼠の数は段々に増した。五匹が十匹となり二十四匹となる。生むだのか集まつたのか、一月程のうちに、お婆さんの家は鼠で眞黒になつて了つた。

棟の人達は餌も知らなかつた。棚廻りやお婆さんのところへは誰一人お客さんが来ない。

「雨戸がもう長い事閉まつてるが、なに、まだ生きてはゐるよ。」

「生きてるのなんのつて、昨日は米屋へ餅米を買ひに来たさうだ。息をせい／＼切らしてはゐたがな、なんでも三日目に二升づゝ買つてくとよ。」

「ほう、鬼婆め、まだえらい元氣だな。」

村の人は憎々しげにこんな噂をし合つてゐた。

八月十日の朝、源六婆さんは、ひどく身體のだるいのに氣が付いた。

嘔き氣があつて熱がある。頭が痛い、さう思つてゐるうちはまだよかつた。恐ろしく暑い日で蟬がじん／＼鳴いてゐる。お婆さんはありつたけの布團を出して見たけれど、それでもひつきりなしにがた／＼慄えた。顔の前の鼠が無暗に大きく見える。猫の様に膨大な一匹がキューツと言つて自分の額に飛びかゝつて来る。お婆さんはそれを追ひ拂ふことも出来なかつた。

夢とも現ともなく、お婆さんは薄暗い部屋の中をのた打ち廻つて苦しんだのを覺えてゐる。身體中に腫物が一面に出来て、それをボリボリ、ボリボリ引掻いたのを覺えてゐる。

そして、

「あゝ、夜になつたぞ。」
さう思つたのを最後として、それつきり凡てが不明瞭になつて了つた。
翌日の朝まで生きてゐたのか、それともその夜の中に息を引取つたのか、それは最後まで解決出来なかつたことである。

源六婆さんが、米を買ひに来ないといふので、先づ米屋の亭主が騒ぎ出した。外から雨戸に耳を押し付けると、確かに何かの音はする。それでもどこか様子が變である。亭主は思ひ切つて中に這入つて見た。

「あ！」

亭主はのけ返るばかりに驚いて、蒼い顔をして巡査駐在所に駆け込んだ。巡査、お医者さん、そして消防隊の組長、皆んながどや／＼と源六婆さんの家に入り込む。

鼠、布團、肉、骨、齒基、そして掌骨！

人々は、わつ！と言つて一散に逃げ出した。そして話はまだあるのだ。

械の人々は、たつた三人だけを残して、皆ベストで死んで了つた。

その四 老婆と銀貨

「榮太榮太つて、榮太ばか目の敵にしないでおくなんしよ。榮太と一緒に、治作だつてこゝにゐたぢやアござんしねえか。」

「治作はまんだ五つでござんす。治作よりは榮太の方が金を欲しがります。榮太に違えありませんえ。」

「何かつちやア榮太だつて、おつかさま、治作だつて榮太だつて、みんなわしの生んだ子でござんすに。」

事の起りは、老婆が針箱の上に置いた五十錢銀貨である。それがひよいと失くなつたのに氣が付くと、老婆と嫁とが口争ひを始めた。嫁に來てもう六年にもなるが、榮太といふ子を連れて來ただけに、二人はよけいに解け合はない。

もつとも最初は嫁が悪かつた。「おつかさまが何處かへ置き忘れたんづら」。かう言つたのが、無論さう思つただけのことで理由はない。「まだ耄碌しましねえ。」から始まつて、遂に例の如く「榮

太の仕業づら。」といふことになつた。

いつもならば黙つて座を外す息子が、見兼ねて仲へ這入ると餘計に騒ぎが大きくなつた。

「五十錢ばか、失くなつたつていゝぢやござんしねえか。」

「いんえ、さうはいさましねえ。一月に一圓五十錢しか貰はねえ小遣では、五十錢が大金でござんす。」

「一圓五十錢ぢやア不足だつちいふのかい。」

「不足だとも。とてもあれでは足りましねえ。」

しまつた！ とは思つたがもう遅い。言はなくてもいゝことまでを口へ出して、照れ隠しに、

老婆はいつさう哮り立つた。

夫婦が土間へ下りて蠶網を拂ひ出したので、老婆は一人つきり居間に残されがた、針仕事を續けようとして眼鏡を掛けると、針箱の上にふと眼を止めた。かすかに跡を残して白い二つの點がある。可愛らしい指の跡だつた。

「榮太かな、治作かな。」老婆は少し考へた。

榮太といふのが九つであつた。學校へ行つてゐるので、時々チヨークの破片を持つて来ては悪

戯をする。だから矢張り榮太らしくは思へるか、治作にしてもチヨークさへ遣れば眞似をする。考へ迷つてその指跡を見てみると、次に老婆は傍に、飴の手が垂れてゐるのを見付け出した。頭

だけが黒子程の大きさで、細く尻尾を引いてゐた。

「榮太かな、治作かな。」老婆はもう一度考へて見た。「さうだ、あれ達を連れて来て調べてやらう。」

夫婦には隠れるやうにして草履を穿いた。肥溜の前を過ぎると納屋を覗いた。鶏が吃驚して

駆け出したけれど子供はゐない。舌打ちをして向ふを見ると、ずつと遠くに二人が見えた。

田圃を越して小さな祠があつた。祠の縁に上つてこちらを向いてゐる二人、それが榮太と治作に相違なかつた。

菜園場を避けて桑畑倚りに、わざと迂廻して祠の背後へ出た。

「黙つてるんだぞ。おばあさまに知れると頸根つこ折られるでナ。」

榮太の聲を聞いていきなり出ると、榮太がはつとした顔で眞向きに突立つた。手には飴を巻いてゐた。

「われだナ、この餓鬼め！」

老婆は言つて、榮太の小さい身體をぐいぐいと揺すぶつた。

「違ふよ〜。治作が盗つたんだい。」

「嘘オ吐け。おばあさまを誤魔化すなんて太い餓鬼だ。」

「治作だつちいふに。榮太ぢやねつちいふに！」

「まだ言ふか。さあ、五十錢玉を出せ。われのお袋のとけえ行つて、われのしたことを見せてやらづに。」

「おつかさまア、おばあさまが困るにイ！」

榮太は金切聲を擧げて叫んだが、誰も來て呉れなかつた。頑丈な老婆の手に搦まれてゐたのをやつとのことで振り腕ぐと、鐵砲玉のやうに走り出した。

「われ、待て！ 待てつちいふに諾かねえか。」

老婆は田圃の畔を、菜園場の畦を、そして桑畑の間をせいく言つて走つたけれど、無論敵ふことではない。間もなくへたくとなつて、地べたへ坐つて了つた。

二十分か三十分、老婆は息を整へてゐた。治作に訊けばよかつたによ、さう思つてどつこいしよと身を起し、がく〜とする足を踏みしめて祠の前へ歸つて來ると、老婆は、あつと言つて身を

戻らした。

治作が縁から轉げ落ちて、眞蒼になつて倒れてゐるのだ。

「われ、どうした！ 治作、治作！」

呼んだけれど返事はなかつた。口をあーんと開いて、眼をくりつと剝いてゐる。腕き苦しんだと見えて、頸の邊りに爪の搔き傷が痛ましく残り、小さな手を開かせると、腕いた時に搦み碎いたのか、掌にはチヨークの粉がまつ白く附いてゐた。

醫者が來て、治作の喉から五十錢玉を取り出したのはそれから間も無くの後である。榮太は言つた。

「治作が盗つたんだよ。榮太は餘を賣ることになつたんだけん、おばあさまが來た時に、治作はそいつを口ん中イ隠したんだよ。」

一週間の後、老婆は二階で變死を遂げた。

蒲 鉾

おくめは一寸身を動かさず、と眩暈がする程の、ひどい頭痛をぢつと堪らへて、漬物店の土間に佇んで居た。この秋夫婦共にばつたり稼げなくなつてからは、僅かに貯へて置いた金も、何やかやの費用にあらかたは出て了つて、何時癒るとも知れない自分の病氣や……彼女が肺結核の疑ひで勤め先から暇が出たのは、もう一年も前の事である……それから怪俄をしてからめつきり意氣地のなくなつた夫の事を考へると、行先が不安で不安で、例へ十銭の金でも手離すのが心細くてならなかつた。と言つて、來年こそは、と思へばお正月の縁起物も缺かしたくはなし、それにおくめは「せめて元旦には彼の人のお膳へお銚子を一本つけてあげたい」とかねてから考へて居たのである。昆布巻、鱈子、金とん、玉子焼と、とりぐの色彩の上に、見るともなしの眼を配りながら、おくめはそつと胸算用をして見た。——僅かづゝではあるが、今小僧さんに包ませて居る數の子と刻み鯛とごまめとでは、もう三十五銭になつて居る。あとお酒の悪いのにしてからが、一合買へば、それだけで五十銭、もつと甘美しいものが欲しいのだけ共、——おくめの懐都合では、數の子や刻み鯛でも随分氣張つて買つた事になるのだが、いづれも酒

の肴には物足りないのが憐なかつた。——一つ氣張つて蒲鉾を一丁買はうか知ら、彼の人はいれが大好物なのに、さうすればほんこに申分無いのだけど——と、彼女は五十銭玉を臺口から取り出して、未だ未練らしく蒲鉾を見詰めて居たのである。

「へい、御待遠様。これだけで宜敷う御座んすか」と小僧が新聞紙に包んだおくめの買物を、ばさと言立て、無造作に蒲鉾を積み重ねた臺の端に置いた。

「え、あの……」とも少しで、「蒲鉾を」と言ひかけた唇を嚙んで五十銭玉を小僧の掌へ。これだけと小僧に言はれたのが、びりりと神経へ障つて堪まらなかつた。

「五十銭で三十五銭いたゞきたイ」と小僧は帳場へ言つたが、その僅かの間、急におどくと四圍を見廻し始めたおくめの左手は、その薄い襟卷の下からそつと伸びた。冷たい蒲鉾のむつちりした皮膚の弾力。そしておくめの指先は、ほんの瞬間蒲鉾の上で躊躇して居た。チラチラといろんな考が頭の中を通り過ぎる——未だ今なら何氣なく手を引き込めても遅くはない。五本の指が蒲鉾に掛かつてからは行く處までは行かなくつては、そして見付けられたら、でも彼人はこれでどんなに甘美しさうに呑む事だらう、他の客も氣が付かない様子だから奪れない事はないけれど——おくめがもう一遍帳場の方を眺めた時、思ひ切つた彼女の手は、づつしりした重味を感じた

まゝぐつと襟卷の下へ引き込まれた。右手で一寸その上を押さへて、左手を襟卷の上に廻すと、胸元が紛れもない蒲鉾形に膨らんで、その上に置かれた左手が、取つて付けた様、ひどく不恰好に見えた。襟元を合せる様なしなを作つて右手を添へながら蒲鉾を下へづらせる、その角を少しでもいいから、幸ひ緩く絞めた帯へ引き掛け度かつたのである。だが未だ思ふ通りに納りが付かない内に、もう小僧はこちらへ向いて了つて、おくめはお腹でも痛むと言つた風體で、前躰みになつたまゝ右手で釣銭を受け取るより外なかつた。そして悪い事には、左手は全く塞がつて居る上に、藁口を帯に挟んで置いたので、右手の指に釣銭を掴まんだまゝ、ぎこちない姿勢ではつきり小僧と向き合つて了つた。跋の悪さ、おくめは全身に感ずる小僧の視線に思はず眼を伏せた。が、それでも折よく待ち兼ねた他の客に小僧が呼び立てられて、彼女のさし迫つた危険は兎も角過ぎ去つたのである。粘い唾をごくりと呑み込んで、くるりと彼女が向きを返へると、ぱつと吹き付けた風が、右手の襟卷をひらりと後ろへ流して、危く蒲鉾の角が見えさう。慌てゝ二三度左手の指を思ひ切り伸ばしても届かない。漸く氣付いて釣銭を持つた右の手で襟卷を掴まへて前で合せると、今度こそ本當に、恰好よく蒲鉾が隠れて、彼女には何故右手を使ふ事に早く氣が付かなかつたかと、腹立たしくさへなつた。そして、ほんとにしとを馬鹿にしてるよ、と、そんな事を獨言しながら、見付けられなかつた嬉しさに、つい小僧を蔑む様に鳥渡眺める程の、餘裕さへ生じたのであつた。

然し乍ら、何氣ない様子で表通りの方へ身體を向けた時、おくめは、どきんとして其處に立ち縮ませられて了つた。通りを越して漬物店には眞向に當る床屋から、その親方が白い上張りの儘、凄く險幕でこちらへ飛び出して來たのである。彼女にも油断のない積りではあつた、が、通りの向うの床屋には、そして殊に其處に張り並べられてある筈の鏡の事までには、全然注意が行き届いて居なかつた。棒の様に身體を硬ばらせて、麥藁細工の様に神経が空虚になつた兩脚に辛くも身を支へて居るおくめの眼の前に、もうづかくと親方は立ちはだかつた。ぬつとその赭ら顔を店の内へ覗かせると、

「田中さんのお主婦さん」と、親方は客の一人に呼び懸けて「今丁度手空きなんです、旦那に直ぐつて、御願しやす」と言つたのである。

おくめは外へ出ると始めて心底からほつとした。そして「ほんとにしとを馬鹿にしてるよ」ともう一度獨言して彼女は考へたのである。——床屋の表戸は曇り硝子ぢやないか。それによしんば戸を開いて居たにした處が、あゝさうだつて。あそこの鏡は表通りへ向いて居るんぢやないん

だもの——おくめはもうすっかり満足して了つた。そうすると、暫く忘れて居た頭痛や、背骨を不氣味に傳はつて来る悪感が一層激しく感じられても来たが、「これであとお酒を一杯とつて行けば、彼の人どんなに喜ぶだらう。稼げないつて遠慮してるのが氣の毒だわ」など、彼女は足取も軽く、いそぐと歩き出した。氣の早い追羽根が、ついと頭を越えて飛んだ、大賣出しの赤い旗が景氣よくくるくると風に揉まれる、おくめは忙しい暮の街の情景が、何故ともなく氣に入るのであつた。

憊うして彼女が漬物店から三四十間も来た時であつた。誰かに呼ばれる様な氣がして後を振り向いた刹那、焼き付ける様に眼に映つたのは、自分を呼び懸け乍ら追ひ付いて来る先刻の小僧であつた。ぎくんと歩みを止めたおくめの眼が病的に見張られた次の瞬間、矢庭に彼女は、ばたばたつと駆け出した。街の飾りも人の顔も、もう眼に入らなかつた。小うるさく通る車やちよこちよこと出て来る小僧が氣を苛立たせた。無性に息が切れて口が乾いた。それでも我武者等に走つた。赤い物、白い物、丸い物、角な物、……。そして遂に小僧が彼女の肩に手を掛けて了つた時、おくめは自分で「どろぼう！ どろぼう！」と叫んで居たのである。

「何んでえ、どろぼうなんて」と小僧も息をはずませて居た。

「お主婦さんぢやねえか、忘れ物は」

小僧の手に差し出されたのは新聞包み、蒲鉾の横に置かれたおくめの買物であつた、五體を揉む様に激しく眩き入つて居た彼女は、軀ては「は」と苦しい息を吐き乍ら、小僧の顔、手と云ふ風に順々に見下ろして行つた。小僧は不思議さうな顔付きで、口を突んがらせて又言つた。

「忘れ物を持つて来てやつたのに逃げるなんて」

それでもおくめは沈黙つて居た。ボンヤリと新聞包みを見詰めてゐた。そして、どやどやと人が集まつた時、彼女の兩脚が操り人形の様へたくと地上に屈折れた。お尻をへたんと地べたに喰付けてぐるりと取り巻いた人を見廻した。急に、おくめの顔が奇妙にひきつゝて、泣くとも笑ふともつかない表情になつたと思ふと、さつとばかり、その落ち凹んだ双の眼に涙が溢れて、油氣のない髪の毛の振りかゝつた頬を傳つて二筋三筋。

「おー、おー」

とはては子供の様に泣きじやくるおくめが、つと小僧の眼の前へ出したのは、その襟卷の下にひつしと抱き絞めて居た蒲鉾であつた。

栗盗人

餓鬼大將の留公が、

「栗を取りに行かんか、俺の家の山へ。」

と誘つて呉れたので、喜んで一緒に出掛けた。子供の頃の事である。

自分が樹へ登つて栗を落す役、留公が下でいがを剝く役だった。かれこれ一升も取れたと思ふ頃、留公が栗を持つたまゝ、いきなり向うへ逃げ出した。

「どうしたんか、留さやあい！」

と自分が樹の上から叫んでも、ぐんぐん走つて行つて了つた。仕方が無いから下へ降りると、そこに他の一方の餓鬼大將善公が、によつきり立つて居た。

「俺の家の栗を盗んだな。」

と言ふのである。この餓鬼大將は、腕力だけで大將になつて居るので、幾分薄のろだったが、栗の木は確に善公の家のものらしかった。力の弱い私は次の約束をして、やつと許して貰つた。一、家の畑の梨を毎日三つづゝ善公に届ける事。

二、學校へ行く途中に、善公の家の前で十べんだけ言ひなす。

ら一人で行く事。善公が強かつたし、自分が盗人をやつたので、當分この約束を守らなければならなかつた。

後で留公にこの話をして、留公の嘘を詰ると彼は「よし、俺が行つて善公をとつちめてやる」と言つたが、その結果は約束の第二項が無くなつた代りに、梨の数が四つに増して、之れを留公が先方へ届けて呉れる事になつた。

それでも、屈辱的な第二の約束が取れて嬉しかつたが、大事件が起つて了つた。梨の事が親父に知れたのだ。親父は單に、自分が梨を友達に分ち與へるのと思つたらしいが、自分は非常に困却して、例の奥の手で、やたらにすねた。そのお蔭で、母親から、欲しくて堪らなかつたハーモニカを買つて貰つたが、留公を介して善公からの催促が激しくなつた。

おしまひに留公までが怒つて了つて、毎朝、留公と善公の名を二十べんづゝ呼ばされた。友達は、二人の餓鬼大將が仲良くなつて、その中に小さい自分が一緒に歩いて居るのを見て、自分までを尊敬し始めたが、内心では、辛くて堪らなかつた。學校へ行けば自分が級長で、留公や善公に指もさゝせなかつたけれど、學校の門を出ると、自分は二人の小使の様になるのだつた。

ある日、留公が言つた。善公の居ない時だつた。
「善公がとても怒つて居る、梨を寄越さないなら、何か代りのものを寄越せ。さもないと先生に栗を盗んだ事を言ひ付けるぞと言つて居た。」

「だつて、もう梨は皆んな挽いだから駄目だ。」

「だから、代りのものをやつたらいい。」

留公は、ほんとに自分の事を心配して呉れた。幾度も同じ事で、強請られるのは迷惑だから、いつそ今度は何か大きな品物でも呉れてやつて、きつぱり片を付けた方がいゝと言つて呉れる。本が澤山あるから本を善公にやらうかと言つたら、善公は本が讀めないから喜ぶまい、何かいゝものはないか、などゝ仔細らしく首をひねつた留公は、ハーモニカをやつて了へと、しきりに勧めた。

「ハーモニカは惜しいなあ。それにハーモニカをやつた後で又何か寄越せと言はれたら困る。」と言ふと、留公は、

「では、俺がそのハーモニカを善公に届けてやつて、その時善公と、しつかり約束してやる。」と言ふ。自分はその後三時間もぶつ續けにハーモニカを吹いた。その翌朝留公は私の手からハーモニカを受け取つたのである。

その後、幸ひにして善公からは何も言つて來なかつた。自分もなるべく善公に逢はない様にしたし、善公も自分を探さなかつた。

二ヶ月程経つたある日、留公の家へ遊びに行つた。雪の降る日で、縁端の傍へ、雀を取るひつづくせを作つて居た。

ガチャンと後ろで音がして、留公の弟が何か投げ出したらしかつた。ふり向くと、そこに自分が見るべからざるものを見て了つた。ニッケルがところ／＼剥げたり、赤い錆が斑に吹き出したり、片側の鐵板が危く取れかゝつては居るが、それは、自分の大切な大切なハーモニカのなれの果であつた。

流石に、留公も困つた様な顔で、いきなり弟の頭をびしやんと張り飛ばしたが、自分は何も言はずに留公の家を出た。そしてその足で善公の家へ。善公は梨を二つづゝ、留公と分けて食べた事を白状したが、ハーモニカの事はてんで知らなかつた。

5
16

それから約十五年の後、久しぶりで故郷へ歸つた自分は、留公が、近所で評判の稼ぎ者で、且つは新聞に出された程の親孝行者になつて居ると聞いて、何とも言へない奇妙な感じを覺えたのである。めでたし、めでたし。

昭和四年五月二十五日印刷
昭和四年五月二十八日發行

版權
所有

發兌

東京市芝區愛宕下町
四丁目六番地

日本探偵小説全集第九篇

著者 大下宇陀兒

發行者 山本三生
東京市芝區愛宕下町四ノ六

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ二

改造社
振替口座東京八四〇二番
電話芝(43)自一一二四番
至一一二四番

(刷印舎英秀社會式株)

(兩角製本)

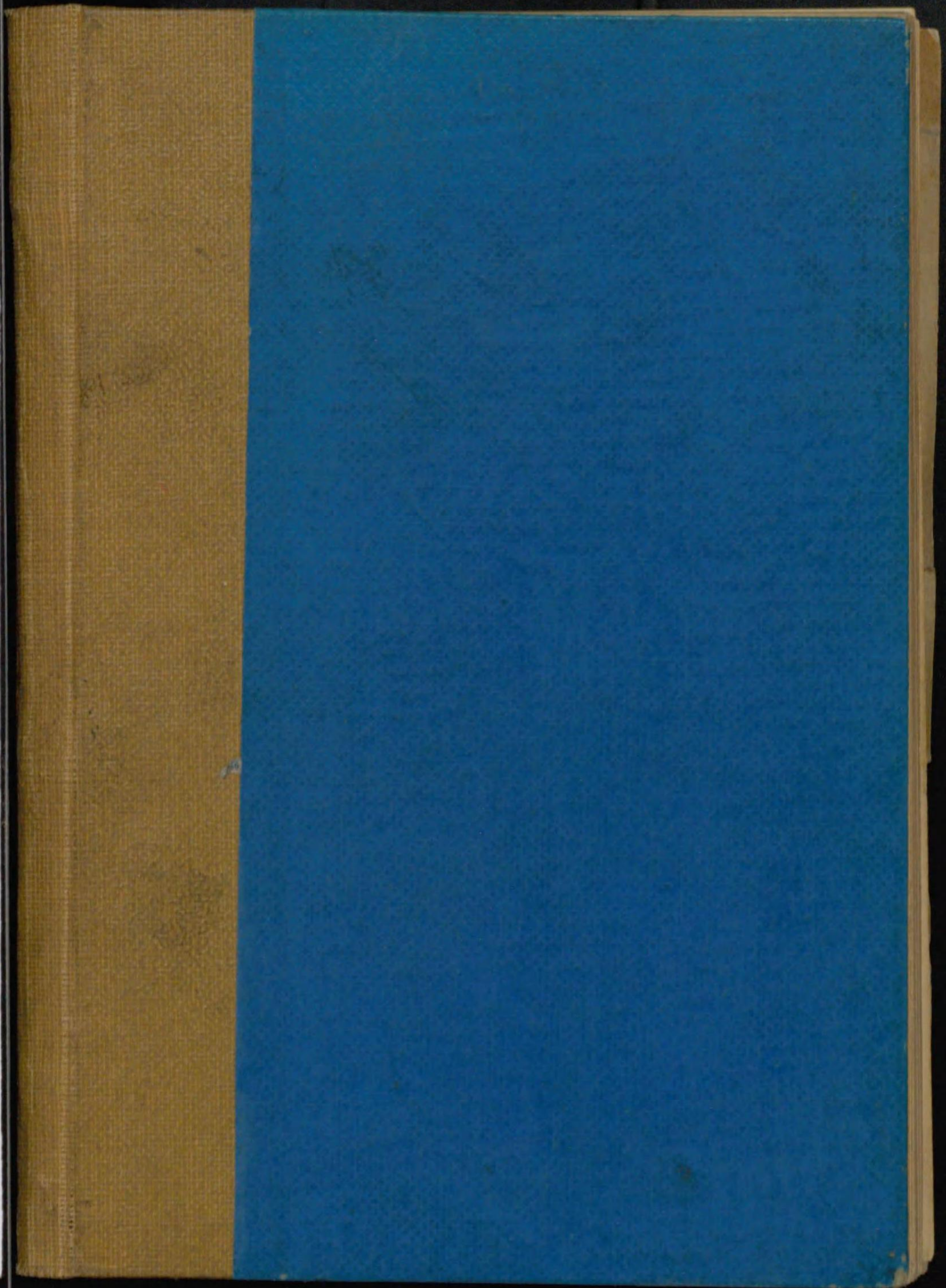
1821 邦

5

569

167



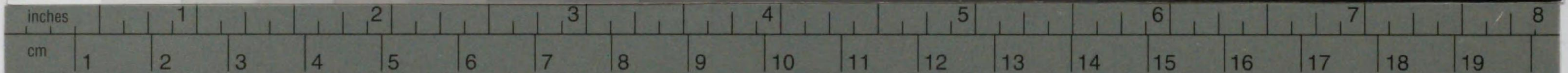


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

